

# キリストの真理

## - HIS TRUTH -

“わたしは道であり、真理であり、命である” ヨハネ 14:6

東京キリストの教会 日曜基礎神学クラス

前期 2004年2月15日～3月21日 5クラス

後期 2004年4月11日～5月30日 6クラス

# 目次

## "His Truth" by Jack Cottrell

---

<b>第1章 聖書についての真理</b>	4 ~ 10 ページ
.神がくださった真理	A. 確かな真理の源泉は神のみ B. 聖書は神からのもの C. 聖書は真理
.罪びとのための真理 .永遠に確かな真理	
<b>第2章 神についての真理(1)</b>	11 ~ 14 ページ
.神は創造主	A. 創造主の本性 B. 被造物についての意味
.神が支配者	A. 神の摂理 B. 神のみこころ C. 神の本性
<b>第3章 神についての真理(2)</b>	15 ~ 19 ページ
.贖罪の必要性 .神が私たちの罪の贖いを望まれたこと .私たちを救う神の御力 .事実としての贖罪	
<b>第4章 人間についての真理</b>	20 ~ 24 ページ
.人間を形づくるものは何か？	A. いくつかの選択肢 B. 肉体と霊 C. その意味する事柄
.「神のかたちに」	
<b>第5章 罪についての真理</b>	25 ~ 30 ページ
.アダムの罪	A. さまざまな見方 B. ローマ 5:12-21
.個人の罪	A. 罪は私達をとががありとします B. 罪は私達を病める者とします
<b>第6章 死についての真理</b>	31 ~ 34 ページ
.死は罰であること .死は敵であること .死はうち負かされた敵	

<b>第7章 恵みについての真理</b>	35 ~ 38 ページ
.恵み:与える心	
.恵み:神の特質	
.恵み:救いへの道	A.律法による道 B.恵みによる道
<b>第8章 イエス・キリストについての真理</b>	39 ~ 44 ページ
.イエスはキリスト	A.油注がれた預言者としてのイエス B.油注がれた祭司としてのイエス C.油注がれた王としてのイエス
.神の子としてのイエス	A.神である子 B.受肉した神
<b>第9章 回心についての真理:神の招き</b>	45 ~ 47 ページ
.カルビン主義	A.無条件的予定 B.不可抗の恵み
.聖書の見解	A.条件付き予定 B.福音による招き
<b>第10章 回心についての真理:人間の応答</b>	48 ~ 51 ページ
.「恵みにより」	
.「信仰を通して」	
.「バプテスマの時に」	
.「良い行いのために」	
<b>第11章 義認についての真理</b>	52 ~ 56 ページ
.義認の意味	
.義認の根拠	
.義認の手段	
.義認の時	
<b>第12章 聖化についての真理</b>	57 ~ 60 ページ
.聖化の意味	
.聖化の可能性	
.聖化のための力	
.聖化を求める動機	
<b>第13章 救いの確信についての真理</b>	61 ~ 64 ページ
.「一度救われたら、永久に救われている」?	
.「救いの確約はない、一生懸命励むのみ」?	
.聖書的確信	A.「神の力によって守られている」 B.「信仰によって」

## 第1章 聖書についての真理

たとえば、あなたが聖書を一度も見たことがなく、また聖書を持っている人とぜんぜん知り合いになったこともないと仮定してみてください。あなたは今一体どんな神に祈っていることでしょうか？「聖なる木」とか、あるいは「魔力」のようなものでしょうか？

人はどこからきて、またどこへゆこうとしているのかということについて、あなたはどのように思いますか？あなたはもしかしたら、人間の肉体は罪を犯したが故の処罰のようなものだと考えていたり、その結果救いというものは、肉体からの脱出だというふうに考えてはいませんか？

ともかく、こうした疑問への答は一体あるのでしょうか？神や人間について、どこかに真理を求めることなどできるのでしょうか？

実はできるのです。仮に聖書が無かったとしても、人間にはそうした知識にまったく欠けるということはないのです。この創造された宇宙そのものが私たちに神と人間とのかかわり合いについて、あることを示しているのです。こうした自然界を通してあらわされる啓示は「**一般啓示**」と呼ばれることがあります。その意味は、誰にとっても知りうることであって、それによって知られる真理が、特別というよりは普通に分かることだということです。

たとえば、宇宙が広大でありながら、しかも秩序を保っているということは、その創造者が知恵と力に満ちたすばらしい方だ(詩篇 19:1)ということを示しています。また、地球の自然の恵みの深さは創造主の本質が慈しみに満ちたものだということを示しています(マタイ 5:45;使徒 14:17)。創造の御業が完全ですばらしいことはそれが全能者の手になるということと、その方が神をおいてほかにはいないということを明らかに示しています(ローマ 1:18-20)。

神によって造られ、神にまったく依っている私たちが、創造主なる神のこの知恵に従ってゆくべきことは、私たちの責任なのです。例をあげれば、天地を造られた方として神をあがめ、その慈しみの深さに感謝すべきことは誰もが知っています(ローマ 1:21,22)。また、基本的な道徳心が私たちに生まれつきあるらしい(ローマ 2:12,15)ことは、おそらく私たちが神の似姿に造られたことの結果なのでしょう。

大事なことはつまり、こうした真理が単に「知りうる」ということだけではなく、一般啓示を通して実際に「知られている」ということなのです(ローマ 1:20 では「はっきりと認められる」と言っています)。

さて、重要な点はこのことです。つまり、この真理がふつう異教徒と呼ばれる、一般啓示しか与えられていない人たちによってどう扱われてきたのかということです。この点についてはローマ 1:18-32 に悲しい答がなされています。つまり、真理は押し隠され、汚され、ねじ曲げられたのです。素直な心からする礼拝は気味の悪い偶像礼拝に取り替えられ、みだらな罪がわざとおこなわれたりした当然の報いとして、神の怒りがそうした罪びとたちに直接下ったのです。なぜなら、彼らが啓示を知っていることは言い逃れできない事実だからです。

(ローマ 1:18-32)

18 神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。19 なぜなら、神について知りうる事からは、彼らには明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。20 神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性とは天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。21 なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。22 彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、23

## キリストの真理

不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。24 ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられた。25 彼らは神の真理を変えて虚偽とし、創造者の代りに被造物を拝み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アメン。26 それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた。すなわち、彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代え、27 男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである。28 そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。29 すなわち、彼らは、あらゆる不義と悪と貪欲と悪意とにあふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言する者、30 そしる者、神を憎む者不遜な者、高慢な者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり、31 無知、不誠実、無情、無慈悲な者となっている。32 彼らは、こうした事を行う者どもが死に価するという神の定めをよく知りながら、自らそれを行うばかりではなく、それを行う者どもを是認さしている。

ここで気をつけていただきたいことは、こうしたことすべてが一般啓示しか与えられておらず、従って、聖書の啓示の知られていないところであっても言えるということです。パウロが、「すべての者は罪を犯し、神の前に罪びととなっている」といったのはこのことなのです ([ローマ 3:9-20](#))。

(ローマ 3:9-20)

9 すると、どうなるのか。わたしたちには何かまざったところがあるのか。絶対がない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にあることを、わたしたちはすでに指摘した。10 次のように書いてある、「義人はいない、ひとりもない。11 悟りのある人はいない、神を求める人はいない。12 すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもない。13 彼らのどは、開いた墓であり、彼らは、その舌で人を欺き、彼らのくちびるには、まむしの毒があり、14 彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。15 彼らの足は、血を流すのに速く、16 彼らの道には、破壊と悲惨とがある。17 そして、彼らは平和の道を知らない。18 彼らの目の前には、神に対する恐れがない」。19 さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法のもとにある者たちに対して語られている。それは、すべての口がふさがれ、全世界が神のさばきに服するためである。20 なぜなら、律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからである。律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。

ここに一般啓示の限界があります。つまり、一般啓示というものは、神が創造主であることや、その恵みや救いについては決して教えてはくれません。ここに一般啓示だけの下にある人間のジレンマがあります。なぜなら、自分も必ず滅んでゆくということは分かるけれども、どうしたら救われるかということとは分からないからです。この後の点については、救い主であるイエス・キリストに焦点を当てる**特別啓示**を通してのみ知られるのです ([ローマ 10:13-17](#))。

以上のことをまとめてみますと、罪びとに最終的に必要なのは救いですが、今一番必要なのは真理なのです。一般啓示を通して与えられた真理を人間は否定、またはゆがめてしまいましたし、救いについての真理は一般啓示を通しては与えられていません。罪深い人間には一般啓示以上のものがが必要です。つまり神、人間、罪、そして救いといったことについての特別に啓示された真理、それも変質されていない明確で完全な真理が必要なのです。そしてこれこそが聖書全体が語っていることです。神のことばは真理であり、真理は私たちを自由にします ([ヨハネ 17:17; 8:32](#))。

この章が焦点を当てようとする事は、聖書の性格が神の救いの計画の本質的な部分をなしているということです。聖書は神からの真理であり、この真理は罪びとのためのものであり、また永遠に変わることがありません。

## I. 神がくださった真理

ある有名な哲学者がかつてこう言いました。「もし私が真理を探さうと、真理を得ているほうとのどちらかを選ばなければならないとしたら、私は前者の方を選ぶだろう。」 こうした選択をしたということは、彼が人間ののっぴきならない状況についてほとんど分かっていないということを示しています。滅びの危機に直面しているときに、本当に必要なことは(1)その困難な事態についての正しい認識と、(2)そこから脱出する方法とをわきまえていることです。のんびりと探している時間はありません。私たちに必要なのは真理であって、それが今必要なのです。

たとえば、ある人が高熱に襲われ、胸や腹に刺すような痛みがあって、腫れ上がって来、脈拍もどんどん下がってきたとしましょう。その人に緊急に必要なことは、病気の原因と治療方法とを知ることです。人間の精神的問題はこうした肉体的病気とは比べものにならないほど重要ですから、真理の必要性はよりいっそう緊急なのです。

### A. 確かな真理の源泉は神のみ

どこにこうした真理が見つかるのでしょうか？ 人間が自分でそれを発見することなどできるのでしょうか？ 私たちがどんなに自負したところで、次のことは認めざるを得ないでしょう。つまり、人間は信頼に足るものではないということです。これについては二つの理由があげられます。

第一に、私たちの知力には限界があること。つまり、人間にはどのような事柄についてでも、真理を極めたと確信することはできないということです。わたしたちの五感でさえもだまされやすいのです。見えていると思っているものを必ずしも見ているとは限らないのであって、感覚はいわば外界からの情報全部が通過するフィルターのようなものです。どれがフィルターで止められ、どれが何らかの形で変形されて通過してきたのかは、決してはっきり分からないのです。たとえば、私が知覚している明るいオレンジ色はそのあるがままの色と果たしてまったく同一のものなのでしょうか？

もし、感覚によって知り得るものについてさえ、こうした不明確さがどうしてもあるのならば、抽象的概念に関する真理については一層私たちの能力は不確かなものであるといえます。ミカンの色についてさえ不確かであれば、正義とか人間の目的とか永遠の生命についてはなおさらでしょう。

第二に、私たちの意志がじゃまをしまっているのです。もはや自分を信頼すべき真理の源とはなし得なくなっています。私たちにある真理でさえも、ちょうどローマ書第1章が示しているように、罪のために圧迫され、変形されているのです。

このように、もし私たちが問題とその解決についての真理を本当に知ろうと思うならば、私たちは神に帰らなければなりません。神のみが真理の確かな源泉です。神は全知であり、すべての叡知、すべての善であり、その知恵は完璧であって、そのことばは真理なのです ([ヨハネ 17:17](#))。

## B. 聖書は神からのもの

神が真理の確かな源泉であることによって私たちが恵みを受けるのは、神が私たちと心を通じ合わせようとされた時だけですが、はたして神がそのようにされたことがあったでしょうか？ もちろんあります。素晴らしいのは、神が人類に語りかけることを選ばれ、それが何よりも天地創造を通した一般啓示の中に明確にかつ直接的に表されていることです。神は言葉をもって語りかけられ、人間の言葉で話されました。そして聖書という変わることはない形で、私たちにそのメッセージを残されたのです。

聖書は人間の手によって書かれてはいますが、その各々の部分は神からの直接啓示です。そうした例としては、一般的なものとして、十戒というモーセ律法と山上の垂訓があります。

聖書のほかの部分は人間の回想や追想です。たとえば、使徒ヨハネが自分とペテロが空の墓まで走った様子を書いたとき、彼は啓示を受けていたのではなく、自分の経験したことを思い出していたのです(ヨハネ 20:1-8)。またダビデの悔い改めの詩(詩篇 51)や、パウロがローマの人々に自分が心から彼らを訪ねたいと思っていることを強調したとき(ローマ 1:10-15)、二人は本心から自分達の思いや感情を表していたのです。

(詩篇 51 篇)

聖歌隊の指揮者によってうたわれたダビデの歌、これはダビデがバテセバに通った後預言者ナタンがきたときによんだもの

1 神よ、あなたのいつくしみによって、わたしをあわれみ、あなたの豊かなあわれみによって、わたしのもろもののがをぬぐい去ってください。2 わたしの不義をことごとく洗い去り、わたしの罪からわたしを清めてください。3 わたしは自分のとがを知っています。わたしの罪はいつもわたしの前にあります。4 わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、あなたの前に悪い事を行いました。それゆえ、あなたが宣告をお与えになるときは正しく、あなたが人をさばかれるときは誤りがありません。5 見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました。6 見よ、あなたは真実を心のうちに求められます。それゆえ、わたしの隠れた心に知恵を教えてください。7 ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう。8 わたしに喜びと楽しみとを満ちし、あなたが砕いた骨を喜ばせてください。9 み顔をわたしの罪から隠し、わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。10 神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。11 わたしをみ前から捨てないでください。あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。12 あなたの救の喜びをわたしに返し、自由の霊をもって、わたしをささえてください。13 そうすればわたしは、とがを犯した者に / あなたの道を教え、罪びとはあなたに帰ってくるでしょう。14 神よ、わが救の神よ、血を流した罪からわたしを助け出してください。わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう。15 主よ、わたしのくちびるを開いてください。わたしの口はあなたの誉をあらわすでしょう。16 あなたはいけにえを好まれません。たといわたしが燔祭をささげても / あなたは喜ばれないでしょう。17 神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心を / かるしめられません。18 あなたのみこころにしたがってシオンに恵みを施し、エルサレムの城壁を築きなおしてください。19 その時あなたは義のいけにえと燔祭と、全き燔祭とを喜ばれるでしょう。その時あなたの祭壇に雄牛がささげられるでしょう。

一部の人にみられる誤った考えは、神から直接に啓示された聖書の部分だけが神の真理とみなされるべきだとする立場です。しかしこれは間違いです。聖書ができあがっていく過程での神の関与のされ方は、啓示のみによるのではなく、靈感にもよるのです。この靈感によって、聖霊が啓示や回想、思想を含む聖書全体の著述を導いたのです。つまり、聖書の著者やそのすべての言葉に神が直接に関与されたのです。

これが、第2テモテ 3:16 に書かれてある、「聖書はすべて、神の靈感を受けている」ということの意味です。「霊

## キリストの真理

感」という言葉は文字どおりには「神の息吹のかかった」とか、「神によって息の吹き込まれた」という意味です。聖書全体はこのようにして神の御業の結果なのです。[詩篇 22:11-21](#)とか[ミカ 5:2](#) にみられる、未来についての預言の場合のように、ある場合には聖書中の息吹は神の直接的啓示を含みますし、ある場合には人間である著者の記憶を刺激したり、その適切さや正確さを確実にしたりするのです([ヨハネ 14:26](#))。また他の場合には、単に著者の記憶の補強をするにとどまる場合もありますが、神は最終的著者として聖書のすべての言葉の背後に立っておられるのです。(詩篇 22:11-21)

11 わたしを遠く離れないでください。悩みが近づき、助ける者がいないのです。 12 多くの雄牛はわたしを取り巻き、バシヤンの強い雄牛はわたしを囲み、  
13 かき裂き、ほえたけるししのように、わたしにむかって口を開く。 14 わたしは水のように注ぎ出され、わたしの骨はことごとくはずれ、わたしの心臓は、  
ろうのように、胸のうちで溶けた。 15 わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちに伏させられる。  
16 まことに、犬はわたしをめくり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。 17 わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。 18 彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。 19 しかし主よ、遠く離れないでください。  
わが力よ、速く来てわたしをお助けください。 20 わたしの魂をつるぎから、わたしのいのちを犬の力から助け出してください。 21 わたしをししの口から、  
苦しむわが魂を野牛の角から救い出してください。

聖書の神的起源については、以下の箇所も参照してください：[ヨハネ 16:12-15](#)；[2ペテロ 1:20,21](#)；[マタイ 1:22](#)；[ルカ 1:70](#)；[第2サムエル 23:2](#)。

## C . 聖書は真理

聖書は神の靈感を受けているので完全な真理です。靈感の主要目的の一つが神の作品としての聖書の真理性を確保することなのです。真理の御霊を与えるということをイエスが弟子たちに約束されましたが([ヨハネ 16:13](#))、それはイエスが使徒たちを真理に導き入れるためなのです。神の言葉はすべて必ず真理です([ヨハネ 17:17](#))。イエスはこう言われました、「聖書はすたれることがあり得ない」(ヨハネ 10:35)。聖書はよく無謬であるとか、誤りがないといわれます。このことは聖書全体についてあてはまります。つまり、その啓示の部分にも、回想や思想の部分にも当てはまるのです。厳密に言えば、無謬性は原典についてのみ言えることであって、写本や訳本には当てはまらないのですが、後者はほとんど正確であって注意深く決定された原典の復元本との検証に耐え得るものです。

## . 罪びとのための真理

本当に聖書は神がくださった真理です。しかし、このことは聖書がありとあらゆる事柄について、それぞれに答となる真理すべてを含んでいるということを意味するものではありません。神のなさろうとしたことはそういうことではありません。本当の目的は私たちに神と人間との関係についての真理を示すということなのです。ですから、私たちは聖書にたとえば原子物理学とかイチゴの栽培方法とかについての詳細を求めるべきではありません。

## キリストの真理

そうではなく、聖書の本来めざしているものと、そのメッセージを決定的なものにする事実は、それが、罪びとに対して向けられたものだということです。聖書のメッセージは神についての真理、人間や罪、そして救いについてのメッセージなのです。

聖書の罪びとへのメッセージには二つの面があります。第一に、律法があること。これは普通、命令の形で書かれています。聖書の律法を通して、罪びとは自分の罪に気づくようになるのです([ローマ 3:20; 7:7](#))。つまり、罪とは何なのかを知り、自分が罪びとであるという事実に直面させられるのです。

罪びとであるということを知ることによって、私たちは自分たちに救いが必要だということが分かります。このように律法は私たちに救い主に対して心向けさせ、また駆り立てるものです([ガラテヤ 3:24](#) を読んでください)。これが聖書の第二のメッセージである、罪びとへの福音(それは神の救いの約束という形で与えられています)を理解するための大切な基礎をなしています。救いについての福音ということが聖書のメインテーマです。これがすべてです。福音の目的は、罪びとがどうすれば救われるのかを示すことであり、恵みによるキリストの血を通して与えられる救いは、いわば「緋の糸」であって、それは聖書全体を貫いています。これが基盤となる真理であり、この真理が罪びとを解放するのです([ヨハネ 8:32](#))。

聖書が罪びとのための真理であるということは、それがありのままの私たち、つまり罪びととしての私たちに向けられているということです。聖書の基本的なメッセージは、誠意を持って心静かに取り組むならば、罪びとであっても理解することができます([ローマ 1:16](#); [ローマ 10:13-17](#); [ヘブル 4:12](#))。

## ・ 永遠に確かな真理

今や相対主義や主観主義が隆盛を極めています。広くみられる考え方としては、たとえば、絶対的な真理などというものはないとか、すべてが真理だとか、すべてが誤りだとか言うものです。このように誰でもその時々自分に「真理」と思われるものを受け入れようとすればそれでいいかのようです。

こういう考え方は、ある人々にはとても気楽に思われるかもしれませんが、多くの人々にとっては絶望に陥る原因なのです。出口が見つからず迷ったり、苦痛からのがれる方法が分からずに死と直面したり、赦される望み知らず最後の審判の確実なことだけを恐れ続けるなどは、苦しみ以外の何物でもないではありませんか。そしてその苦痛がわずかばかり和らげられる時とえば、自分の考えは単なる思いこみであって相対的なものにすぎないと結論づけるときだけなのです。

ここにこそ私たちに真理の源として与えられている聖書の計り知れない恵みの意味があります。それはいわば流砂の只中に堅く立つ巖のようなものです。また、希望と信頼と救いの確信の堅固な礎なのです。

その真理は絶対であり、永遠に残り、また変わることがありません。イエスが「聖書の言は、すたることがありえない」(ヨハネ 10:35)と言われたとき、彼は私たちがいつも神の言に信頼することができると言ったのです。神の言は決して誤ることがなく、その真理は永遠に確かです。イエスの言われるように、「天地は滅びるであろう。しかし、私の言葉は滅びることがない」(マタイ 24:35)。「草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」とペテロ第一の手紙 1:25 は言っています(イザヤ 40:8 の引用)。たとえ宇宙の他の言葉全部が誤りに陥ったとしても、神の言は真理として残ります(ローマ 3:4)。その真理は客観的です。それは誰に対しても同じように開かれています。

## キリストの真理

それは特別な洞察によってしか得られない悟りのようなものではありません。神のメッセージは自分の内側の感覚や、軽率な意見に頼らなくても知ることができるのです。

その真理には権威があります。聖書は神がくださった絶対的で客観的な真理ですから、私たちはそれに心や意志や命のすべてを差し出さなければなりません。このことだけがわたしたちの信仰の堅いきまりであるべきです。つまり、私たちの信じ教える教義は神の書かれた言から引き出されなければならないと同時に、それだけがわたしたちの実践の確かな基準とされなければならないということです。ですから、正しいか間違っているかは聖書に基づくべきです。

ある人は聖書に従うということ、束縛されるというふうに重荷に考えるかも知れません。しかし、真理は人を奴隷とするものではなく、解放するものなのです。聖書の権威に従うすべての人への約束はこうです：「またあなたがたは真理を知るであろう。そして真理はあなたがたに自由を得させるであろう」(ヨハネ 8:32)。

## 第2章 神についての真理(1)

一つの章というわずかなスペースのうちに、神に関する聖書のすべての教えをまとめようというのは暴挙ですので、この章に含まれるものは、より本質的な事柄のアウトライン的概観以上のものではないということを心にとめておいてください。

神がどのようなお方であるかということが一番よく理解できるのは、その三つの大きな働き、つまり創造と摂理と贖いという働きにおいてです。たとえば、神が創造主であるということの意味が分かれば、私たちは神の本質についての一つの面がよりよく分かることになるでしょう。同様のことは神の他の働きについても言えるのです。

### ・ 神は創造主

このようにしてまず創造ということからはじめましょう。クラウフォードは創造について次のように定義しています：「創造とは神の自由な行為であり、それによって可視・不可視の宇宙全体が先在的材料を一切使うことなく、はじめに造られたことを言う」。創造が「自由な行為」であるということの意味は、神が何かを創造しなければならないというような義務はなかったということ、つまり、孤独感や愛によって強いられるのではなく、自由な決定によるのだということです。神が創造を行われたのは神がただそのように望まれたからです(黙示 4:11)。

「不可視の宇宙」とは、霊的存在つまり御使いたちの世界のことを指しています。この世界は義の御使いたちと、また罪を犯して邪鬼や悪魔となっている御使いたち(2ペテロ 2:4)をも含んでいます。これらの御使いたちはサタンを含め、すべて被造物です。

天地創造においてもっとも際だっている要素はすべてのものが「先在的材料を使用することなしに」造られたということです。このことはしばしば「無からの」創造と呼ばれます。神が創造を始める前は神御自身以外には何物も存在していませんでした。そのまったくの創造的力の御業によって、神が物質と霊とを存在させたのです。

天地創造の事実は聖書の最初の教えです。創世記 1:1 には「はじめに神は天と地とを創造された」とあります。ヘブル 11:3 は無からの創造を示しています：「信仰によって、私たちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである」。ナザレのイエスとなった永遠のロゴスは天地創造において活動していました。「すべてのものは、これによってできた」(ヨハネ 1:3)。詩篇 33:6 コロサイ 1:16、ローマ 4:17 も参照してください。

聖書の天地創造についての教義のユニークさ、特に無からの創造という点は注目すべきことです。このような宇宙の起源についての考えは他のどこにもありません。結局、他のどんな神概念も聖書がのべる神に比肩するものではありません。

### A. 創造主の本性

「無から有を呼び出される神」(ローマ 4:17)の本性はどのようなものでしょうか？ そのような神はどんな属性を有しておられるのでしょうか？(心にとめておいていただきたいことは、父なる神について真であることは、神なる御子と神なる聖霊についても真だということです。)

## キリストの真理

神は超絶です。その意味は被造物とは異なっていて、被造物ではなく、それを超えているということです。神のみが被造物ではない霊であり、その他のすべてのものは被造物です。神の本質そのものが、このように被造物とは種類を異にするのです。創造主と被造物とははっきり区別することは基本的なことです ([ローマ 1:25](#); [1テモテ 6:16](#))。

その基本的違いは、超越神は無限だということ、つまり広大無辺だということの意味します。神は時間的に制約されることがなく永遠です。これは始まりもなく、終わりもないことを意味するとともに、時間を超えてはじめてから終わりまでの一切を一瞥するだけで見ることができるということなのです。 [詩篇 102:25-27](#); [イザヤ 44:6](#); [46:9,10](#); [黙示 1:8](#) を読んでください。

神はまた空間的にも制約されません。神は遍在、つまり同時にどこにでもおられます。神は常に空間のあらゆるところに完全に存在し、また意識的に働きかけておられるのです。 [詩篇 139:7-10](#) を参照してください。

また神は力においても無限大であり全能です。実に神が無からこの広大な宇宙を創造することができたからには、神は望むことは何でもお出来になるのです。 [黙示 1:8](#); [詩篇 115:3](#); [マタイ 19:26](#) を参照してください。

神が超絶したお方であり、このように多くの点で無限界の方なので、私たちのように有限な被造物にはとうてい理解しきれることではありません。このことは私たちに神がどのようなお方であるかを、本当には理解することができないということを意味しています。私たちの知識は真実で正確ですが、それは完全であることではありません。有限なものに無限は把握しきれものではないのです。 [申命 29:29](#); [イザヤ 40:18,28](#); [ローマ 11:33](#) を参照してください。

## B. 被造物についての意味

天地創造の事実は聖書の教えの中でもっとも大切なものの一つです。この事実を無視したり否定したりするときに、あらゆる間違いや誤った教義が出てくるのです。他面で、この事実の理解が哲学や倫理学、神学上の多くの問題を解く鍵なのです。ここではより重要な意味のいくつかだけを列挙しましょう。

1. 天地創造はこの物質的宇宙や出来事が本来的に善いことを示しています。神がそれを創造され、また「非常によい」と言われたのです ([創世 1:31](#))。宇宙にある悪性のもの(たとえば、病気や人間の死など)はどんなものでも、自然的でも本来的なものでもなく、それらは罪の結果なのです。 [ローマ 8:19-23](#) を参照してください。(多くの宗教哲学が性悪説を採り、その結果あらゆる種類の誤解と曲解を引き起こしています。)

2. 天地創造がこの宇宙とその歴史に目的とゴールを与えています。ここにもっとも差し迫った哲学的問題--つまり、宇宙全体の意味は何なのかと言う問題--への解答があります。どんな哲学も天地創造ということを除外してはこの問題に答えることは決してできません。人格を持った神による創造という深い考えに基づいた行為のみが、目的とゴールをもたせ得るのです。そうでなければ宇宙は意味のない愚にもつかないものになってしまいます。答は実にそこにあるのです。

3. 天地創造が人間の生に目的と意味を与えます。宇宙全体について真理であることは、その部分についても真理です。もし神が人間の生命を創造したのでないのなら、それは意味を持ち得ません。「人間であることにいったい何の意味があるのか?」といった疑問に答がないこととなります。あるいは、どんな答でもよくなってしまって、どれが正しいとか正しくないとかはなくなってしまいます。

4. 天地創造ということがモラルの基礎になります。超越的創造者である神のみが絶対的きまりや善悪の基準を

## キリストの真理

設定する権威をもっています。さもなければすべての枠組みは相対的なものになり、罪の概念も無意味なものになってしまいます。またこのようにして、超越的創造者である神だけがこれらのきまりに従うべき絶対的義務を設定できます。

5. 天地創造は私たちが永遠に被造物であって、今もまたこれからもどんな意味においても神になることは決してないということを意味しています。人間の魂は神の小さなかけらではありません。救いは、よく他の多くの偽宗教（モルモン教やアームストロング主義）が教えているような、人間が神になることでは決してありません。

6. 天地創造は私たちがいつも創造主を畏れるべきことを求めています。それは礼拝の基礎です。私たちはいつも神に恐れと畏敬を持つべきです。

7. 天地創造は私たちの管理責任の基礎です。神には天地創造者としてすべての所有権がありますが、私たちには持っているものの管理責任だけです。これは自然環境も含まれています。

現代世界が天地創造論を捨てようとしてきたことはよく知られています。

道徳や宗教の領域で混沌のみがあるとしても別に不思議がないのではないのでしょうか？

## 神が支配者

神が宇宙を造り出されたからには、それ以後の歴史と神との関係はどのようなものなのでしょう？すべての被造物の支配者または主としての神の役割は何なのでしょう？

ここで除いておくべき二つの極端な立場は次のようなものです。一つは、神は宇宙の動きのスイッチをいれたのであって、それ以後は身を退き、創造主としての立場からもはや干渉をせず、宇宙がその自動的法則によって動くのに任されたというものです。この見解は普通、理神論と呼ばれています。

もう一つの受け入れ難い極端論は、創造以後の世界に展開している事柄はすべて実際に創造主によって引き起こされているのであって、いわゆる「自由意志」と呼ばれている人間の意志決定についてもそうだとする説です。これはジョン・カルピンの意見であり、普通、カルピン主義と呼ばれる神学体系と結びつけられていますが、この見解のみが天地創造についての神の至高の権威を保持するものだと主張されたりします。

聖書の見解はこれらのどの極端論とも異なるものです。以下に要約してみましょう。

### A. 神の摂理

摂理という言葉はこれから扱う主題を表す包括的な用語ですが、それは進展中の世界への神の関わり方を示す言葉です。摂理は普通二つのカテゴリーに分けられています：第一には自然と神の関係、第二には歴史と神の関係です。

はじめに心に留めておくべきことは、神が自然界のすべてを支配しているということです。一般的な意味では、神はここに発生するすべての事柄を常にコントロールしていることができます。聖書でもいくつかの箇所で、自然界に起きることはどんなことでも（たとえば天候など）神によって引き起こされていると書かれています。確かに

## キリストの真理

私たちを支え、私たちの肉体的な生命存在を維持しているのは神であり、そのほかのすべてのものについても同様なのです。 [使徒 17:28](#); [マタイ 5:45](#), [10:29](#); [使徒 14:17](#); [コロサイ 1:17](#) を参照してください。

しかし、神は地震や火山 ([詩篇 104:32](#)) や吹雪 ([詩篇 147:15-18](#)) といった自然現象をコントロールしている方としても描かれています。ヨブ記 37:1-13 で預言者エリフは、神が処罰や懲らしめといったものをも含むさまざまな目的を遂げるために、天候や雲の動きすらコントロールする方であると描写しています。「自然法則」というのは単に、神が自然のうちに働くときの整然とした方法と見ることもできるでしょう。

また、聖書がはっきり教えていることは、神が歴史全体を支配しており、この世界に起きる事柄のすべては常にそのコントロール下にあるということです。ただし、ここでの神の関与の仕方は異なっています。というのも、歴史には人間の自由意志による決定と行動が含まれているからです。人間の自由の高潔さを尊重するが故に、神はどの人間をも特定の選択をするようには仕向けないのです。神はただ人間の意志決定に影響を与えたり、いろいろな方法で干渉したりすることで強く関与してはいるのです。

世界の歴史を神がコントロールしているさまは詩篇 22:28 にこう書かれています、「国は主のものであって、主は諸々の国民を統べ治められます」。ダニエル 5:21 はこう断言しています、「いと高き神が人間の国を治めて、自分の意のままに人を立てられる」。 [詩篇 33:10-17](#); [75:6,7](#); [103:19](#); [エペソ 1:11](#) も読んでください。

次のような聖書の箇所を見た人の中には、神が実際にある人々に決定させていたように思っ戸惑う人々があるようです。たとえば、ヨセフの兄弟達がヨセフを奴隷として売ることを決めたとき ([創世記 45:5](#); [50:20](#)) とか、パロがイスラエル人をエジプトに引き留めておこうと決心した時のこと ([出エジプト 4:21](#); [ローマ 9:17,8](#)) とかです。またユダがイエスを裏切ろうと決心した時 ([使徒 2:23;4:27,28](#)) もそうです。箴言 21:1 にはこう書かれています、「王の心は、主の手の内にあって、水の流れのようだ、主はみこころのままにこれを導かれる」。

これらの聖句は神が人間に特定の(良いものであれ、悪いものであれ)決定をなさしめるということを意味しているわけではありません。それらが教えているのは、どんな場合でもその状況はまったく神のコントロール下にあるということです。神はご自身の目的にかなう選択をするように特定の人々に影響を与える方法で、こうした状況を操作することができます。神はその人間の性格を予知されて(例:ユダの場合-[使徒 2:23](#))、ある特定の状況でどのような選択がなされるかをご存知なのです。

このように、神が人間の事柄に関わる様は決定とか使役とかという観点からではなく、コントロールという観点から見られるべきです。神は外的状況をコントロールする仕方でも人間の決定に影響を与えることができますし、同様に妨げることもできます。あるいは、自然法則や被造物の決定によって物事が起きるのを単に容認することもできます。これが神の主権ということについての聖書的思考方です。

## B. 神のみこころ

それでは「起きることは何でも神のみ心による」と言っても良いのでしょうか。その通りではありますが、いつもがいつも同じ意味でそうだということではありません。「神のみこころ」という言葉は、神の命令や律法を指す、神の訓示的意志ということの意味するかもしれません ([マルコ 3:35](#); [マタイ 7:21](#))。こういう意味では神のみこころに反する事柄が明らかにたくさん起きています。

この言葉はまた神の目的意志、つまり世界の始まり以来、神によって決定され進められてきた永遠の計画と目

的のことを指しているかもしれませんが、この目的を成し遂げるために必要なことであれば何でも神は実際に、また間違いなく起こされます。しかしある事柄は神の目的になんら関係がなく、従ってこうした意味での神のみこころの範囲内にはないということがあります。 [エペソ 1:3-11](#) を参照してください。また [エペソ 3:8-11](#); [ヘブル 10:7-9](#); [1ペテロ 1:18-20](#) も参照してください。

神のみこころという言葉は神の容認的意志、つまり物事の起きることを容認するということを示しているかもしれませんが、神の目的意志を妨げないことは何でも--たとえそれが罪深く、神の訓示的意志に反するものであったとしても--神の容認的意志の範囲内で発生するのです。少なくともこの意味では、すべてのことは神のコントロール、ないしみこころの内にあります。神は個人に特定の決定を起させないかもしれませんが、実現を確実に妨げることはおできになります。 [ヤコブ 4:13-15](#); [1コリント 16:7](#); [ヘブル 6:3](#) を参照してください。

### C. 神の本性

このようなあり方で宇宙を支配しておられる神の本性はどのようなものでしょうか。神は確かにこの宇宙の中に存在 (= 内在) しておられるはずですが、神は超実在ですが、これは単に神がその手になる被造物とは異なるということであって、空間的に切り離されているとか、距離的にかけ離れているということではありません。 [使徒 17:27,28](#); [詩篇 139:7-10](#) を参照してください。

神は同時に至高の方であり、すべての被造物がその絶対的コントロール下にあります。これは神の全知性と前述した全能性、つまり過去・現在・未来にわたる万象についての欠けるところのない無限の知識を含んでいます。それは予知を含む神の絶対的知識であり、これが神の恒常的コントロールを可能にしているものなのです。 [詩篇 147:5](#); [1ヨハネ 3:20](#); [イザヤ 41:21-23](#) を参照してください。

宇宙を支配しておられる神はまた善でもあります。 [詩篇 36:6](#) を参照してください。また [詩篇 145:9,15,16](#); 148; [マタイ 5:45](#) も参照してください。

(詩篇 148 篇)

1 主をほめたたえよ、もろもろの天から主をほめたたえよ、もろもろの高き所で主をほめたたえよ、2 その天使よ、みな主をほめたたえよ、その万軍よ、みな主をほめたたえよ、3 日よ、月よ、主をほめたたえよ、輝く星よ、みな主をほめたたえよ、4 いと高き天よ、天の上にある水よ、主をほめたたえよ、5 これらのものに主のみ名をほめたたえさせよ、これらは主が命じられると造られたからである、6 主はこれらをとこしえに堅く定め、越えることのできないその境を定められた、7 海の獣よ、すべての淵よ、地から主をほめたたえよ、8 火よ、あられよ、雷よ、霜よ、み言葉を行うあらしよ、9 もろもろの山、すべての丘、実を結ぶ木、すべての香柏よ、10 野の獣、すべての家畜、這うもの、翼ある鳥よ、11 地の王たち、すべての民、君たち、地のすべてのつかさよ、12 若い男子、若い女子、老いた人と幼い者よ、13 彼らをして主のみ名をほめたたえさせよ、そのみ名は高く、たぐいなく、その栄光は地と天の上にあるからである、14 主はその民のために一つの角をあげられた、これはすべての聖徒のほめたたえるもの、主に近いイスラエルの人々のほめたたえるものである、主をほめたたえよ、

これはまた神の愛も含んでいます。神はその全能性を人間を苦しめたりだましたりすることにお使いになりません。それはまた神の信義(faithfulness)をも含んでいます。神には私たちを祝福することとか、ご自分の約束を守ることとか、その贖罪の目的を遂行することとかが可能であり、またそうする事が神のみこころなのです。

## 第3章 神についての真理(2)

贖い主としての神の働きということが聖書の中心的主題であり、従ってこの本のメインテーマもここににあります。贖罪の働きそのものについては、後に詳しく説明しますので、ここでは深く取り扱わないことにします。

心に留めておきたい事実は、贖罪ということがキリスト教だけにある概念ではないということです。大部分の宗教と宗教哲学は人間の苦境とそれから救われる道について、何らかの型を持っています。ただ、そうしたものの大部分はキリスト教の考え方とはきわめて異なっています。事実、贖罪についての聖書の教えのみがまったくの恵みによる救いをもたらす、またそのことを約束しています。救いについて体系を組み立てようとする他の試みの大部分は、次のうちのどちらかにあたります。つまり、知識による救いか、行いによる救いかということです。歴史をさかのぼってみると、多くの人々や宗教体系は人間の問題点の根本的原因は無知にあると決めつけてきました。こうしてそれらは知識(啓示や教育)に基づいた救いの道を考案してきたのです。こうしたアプローチの例としては、プラトン主義、グノーシス主義、またいくつかの神秘主義があげられます。

そのほかの大部分の体系では、人間の苦境についての考え方がどうであれ、それから抜け出す道は個人の行いのみによって達成されるとしています。つまり、もし神が介入しているのなら、人は神の感情を損なわないよう行動すべきであり、もし神の感情が損なわれているのなら、人はその怒りをなだめるよう行動しなければならないとするのです。大部分の未開宗教はこのタイプです。転生を説く宗教では、人は転生によってその実体をより高くしてゆき、ついに頂上に達し、もうそのサイクルの中に入ってゆく必要がなくなるとはじめて救いを達成するとされています。こうした進展は行い(善、敬虔、奉仕、滅私)という基礎に立ってのみなされるとするのです。

贖罪についての聖書の教えはこうした考えが不毛で誤ったものであることを示しています。人間の罪の問題はきわめて深刻な問題であって、教育とか善行とかで解決されるものではありません。救いは根本的に異なった道筋--つまり、神の恵みから来なければなりません。私たちが救われ得るのは、[ローマ人への手紙 3:24](#)にあるように、「価なしに神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって義とされる」ことのみによるのです。

この章で取り扱うのは、特に贖罪という働きに現れているありのままの神の本性についてです。罪の贖いということと自体がキリスト教の教えのユニークさであるように、このみわざを成し遂げられた神の本性もまたそうなのです。

### ・ 贖罪の必要性

神の本性の全体は、神が贖罪を成し遂げられたという面のみでは理解できるものではなく、その前に贖罪の必要性をあらしめたものが何なのかということを理解しなければなりません。つまり、神の聖性と怒りの両面を含む神の正義ということの理解が必要です。

聖書では「聖」という語は基本的には「分離する、区別する」ということを意味しています。その第一に意味するところは、神が被造物ではないということからくる、被造物との分離ないし差異ということです。(言い替えば、超越しているということです)。しかし、同時に義なる神の罪との分離、あるいは神の絶対的純粋性と公正さ、道徳的

崇高さと完全さということを意味しています。

「我らの神、主は聖である」と[詩篇 99:9](#)には書かれています。その聖なる性質が私たちの生き方の手本であることについてペテロ第一の手紙 1:16 はこう言っています：「私が聖なる者であるから、あなた方も聖なる者になるべきである。」神はすべての罪の正反対におられ、聖なる激情を持って罪を憎んでおられます。詩篇作者は神についてこう書いています：「あなたは義を愛し、悪を憎む」(詩篇 45:7)。「あなたはすべて悪を行う者を憎まれる」(詩篇 5:5)。[イザヤ 59:2](#); [ハバクク 1:13](#); [ヤコブ 1:13](#) も参照してください。

神は罪に接したとき、その聖なる本性のゆえに、怒りを持って応答せざるを得ないのです。指摘に価する興味深いことは、罪びとたちが神の怒りを決して強調したがるらないということです。現代の自由主義的宗教は、この神の怒りという考えを否定しがちです。たとえば、ある実存的神学者がこう言っています：「怒りというのはどのような形であれ、神には無縁である。神の慈悲は無限だ。」

聖書が終始、神を怒りの神として描いている以上、この意見の持ち主が聖書の神について語っているのでないことは明かです。ある人の数えたところでは、旧約聖書が神の怒りについて言及している所は580箇所、新約聖書もこのことについては、負けず劣らず強調しています。[イザヤ 30:27-31](#); [エゼキエル 7:8-14](#); [ヨハネ 3:36](#); [黙示 6:17](#)。 [黙示 14:19](#) を参照してください。

もちろん神の怒りは気まぐれであてずっぽうなむら気であるとか、抑えのきかない怒りの爆発とか、発作とかではありません。それはただ聖でないものすべてに対する、聖なる神の自然で不可避な応答なのです。それは神の性質そのものに反する罪に対する神の正当な義憤なのです。

贖罪が必要だった理由は、この神の義なる怒りです。人間の苦境についての他の見解はどんなものでも、その重要性においてとるに足りないものです。ですから、罪びとは神の怒りの下であって、主のみもとから退けられて永遠の滅びにいたるのです([2テサロニケ 1:9](#))。私たちの神は、焼き尽くす火です([ヘブル 12:29](#))。

### ・ 神が私たちの罪の贖いを望まれたこと

聖書が罪びとたちに対する神の怒りということを強調している点からみると、神が私たちが何とかして救おうとされたということは、意外なことに思われるかもしれません。しかし、確かに神がなされるのです：「主は...一人も滅びることがなく、すべての者が悔い改めにいたることを望んでおられるのです(2ペテロ 3:9)。私たちの罪を贖いたいという神の願望が、何よりも言葉に尽くせない神の愛を明らかにしています。

愛はそのもっとも基本的な意味では、良い意志を持った態度、あるいは他人の幸福に対する慈しみに満ちた配慮です。これは疑いもなく、神の被造物に対する基本的姿勢です。ヨハネ第一の手紙 4:8 が言っているように「神は愛なのです」。

人間の幸福を望まれる神のみこころが、苦しんでいる人や惨めな人やかわいそうな人に向けられるとき、それは慈悲と呼ばれます。神がその慈悲の目で精神的な危機や欠乏にある私たちをご覧になるとき、必ずや私たちがそこから救い出したいと望まれるのです。この姿勢を表す別の言葉には親愛あるいは同情があります。

[申命記 5:10](#); [詩篇 5:10](#); [詩篇 86:5](#); 詩篇 136 篇 を参照してください。

## キリストの真理

私たちがただその被造物であるというだけの理由で、神がどんなにこうした心配りをしておられるかということは分かりましたが、私たちが罪びとであるにもかかわらず、それでも私たちを愛しておられるということは本当に驚くべきことです。

[ローマ 5:1-11](#); [エペソ 3:19](#) を参照してください。愛がこのように価値のない、それに値しない者に向けられるということ、それが「恵み」と呼ばれるものなのです。恵みは愛らしくない者への愛であり、恵みへの権利をすべて失った者への恩寵です。私たちの神はそのようなお方なのです。[エペソ 1:6,7](#); [エペソ 2:7-9](#); [ローマ 3:24](#) を参照してください。

### 私たちが救う神の御力

神が私たちが救いたいと望まれるにしても、神にそれができるのでしょうか？神に私たちが救う力があるのでしょうか？無からの創造と宇宙全体に行われている神の至高権との中に現されている偉大な力の何たるかを、私たちはすでに見ました。明らかに、そうした力のお方である神には罪と罪びとの事柄に対して力を持っているのです。

このことは確かですが、銘記しておきたいことは、どういう種類の力かということ、つまり力そのものとしての「実」力です。事実、全能の神には罪に対する処理方法として、単に悪と悪行をする者とを壊滅させてしまうということだって可能なのです。結局、悔い改めない罪びとたちは皆そうしたたぐいの破滅に苦しむことになるでしょう。

しかし、神は罪に対するこうした力のみでのかかわり方に満足されるわけではありません。神の愛がそれを許さうとします。その愛と慈しみと恵みの故に、神は異なった種類の力によって罪を打ち負かすことを選びになり、また打ち負かすことがお出来るのです。つまり、破壊し壊滅させる力ではなく、引き寄せる力、道徳的な力、「血の通った心(heart)」の力です。

[ローマ人への手紙 1:16](#) でパウロは(キリストの死と復活の)福音は救済ということのための神の力であるといっています。それが真理であることは、福音が成就されたことと、宣言されたことの両方に表れています。福音は単なるメッセージではありません。それは行為であり、行動なのです。それは愛の行動であって、この世が知り得る限りのもっとも深く感動的な愛の行動なのです。十字架は行動的愛であり、ここで神の愛が、ある意味でご自身の怒りを打ち負かしたのです。それは力業によってではなく、むしろご自身の最愛の子の限りない苦しみを通して、怒りが充足されたことによるのです。

福音が確信させ、動機づけ、意志を動かし心を溶かす力であると宣言されているのはそういうわけなのです。イエスは言われました、「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人を私のところに引き寄せるであろう」(ヨハネ 12:32)。「十字架の言は...神の力である」とパウロはいいました([1コリント 1:18](#))。神の愛がやっかい者でもどんなに救おうとされているかを私たちがついに知りさえすれば、私たちの心が打ち負かされて(ある意味で)、そして私たちは自分で神の愛に答えることになるのです([1ヨハネ 4:19](#))。

神の創造的・摂理的力の前に畏敬の念を抱くとき、私たちはその救いの力に、よりいっそう驚嘆するはずですが、なぜなら、それは何物にもまさった力だということが感覚的に分かるからです。

イソップ童話の中に、風と太陽がどちらが強いかで言い争った話があります。両者は旅人の外套を脱がせること

## キリストの真理

のできた方を勝ちとする事にしました。風は吹きまくって吹き飛ばそうとしましたが、旅人はかえって外套をますますしっかり纏うだけでした。その後で太陽はこれとは違う力を使い始めたのです。つまり、暖かく静かな陽の光です。旅人はじきに額の汗を拭い、外套を脱いだのです。

罪びとの私たちにとって本当に感謝すべきことに、私たちの神はどちらの種類の力も持っておられます。

## 事実としての贖罪

神が私たちが救われたということの事実そのものの中には、神の本性の或ることが現れています。神がイエス・キリストを通して私たちの罪の贖いを成し遂げられたとき、神は地の基が据えられる前に立てた計画を実行されたのです ([1ペテロ 1:18-20](#))。神はアダムとイヴの時代に最初になされた約束を果たされたのです ([創世記 3:15](#))。

神がその計画を成し遂げられ、その約束を果たされたことの中には神の誠実さが現れています。神が約束されたことは果たされるのです。そう信じきって良いのです。 [詩篇 89:1](#); [哀歌 3:22,23](#); [イザヤ 25:1,2](#); [2テモテ 2:13](#); [ヘブル 10:23](#)。神は岩のように堅く、また信頼できるお方です ([申命 32:4](#); [詩篇 62:6,7](#))。

事実としての贖罪から、私たちは神が変わることのないお方、つまり不変性を持った方であることが分かります。神の本性に関するこの点をめぐっては、あらゆる種類の極端な解釈が出されてきました。ギリシア哲学の過度な影響を受けた初期キリスト教神学者たちは、神を花崗岩の彫像のようにじっとして動かないもののようにみなしました。悲しみや喜びといった感情を表すことすらありえないとしたのです。

他方で現代的手法の哲学者や神学者がいます。彼らは神を他の事柄同様、常に変化し進化しているとして描きます。この見解は進化論がすべての学問分野を席巻している時代には非常な注目を惹きました。しかし他の見解同様、それは非聖書的な極端論として排斥されるべきです。

聖書は神が不変であると教えています：「主である私は変わることはない」(マラキ 3:6)。 [ミカ 7:18-20](#); [ヤコブ 1:17](#); [ヘブル 13:7-9](#) も参照してください。ただし、この根本的な点は、やはり神の誠実さです。神はその心や目的を変えることはありません。神は真実で誠実です。神は移り気でなく、いつでもまったく恒常的です。このことは神の本性が一定であり、不変であるということの意味していますが、その手になる被造物との真の内面的交流や、悲しみ喜びといった真の感情を閉め出しているということではありません。

J. B. フィリップが「あなたの神は小さすぎる」というすぐれた本を著わしていますが、その中で彼は私たちが神について見当違いの考えを持っているとがめています。しかしまさに本当の意味で、神についての私たちの考えは小さすぎるのです。私たちが神をどんなに偉大に描こうとも、実際の神が常にそれ以上偉大であるということは明らかです。ハレルヤ！何という救い主でしょう。

## 第4章 人間についての真理

「人間とは何者なのか...?」と詩篇 8:4 は問いかけています。今日もっとも一般的な答は「何者とでも、なりたい者に」というものでしょう。つまり、誰でも自由だから「好き勝手にする」というわけです。

これは進化論に基づく現代の相対主義の単なる一表現なのです。現代人は次のように結論づけます:「人間の本质」などというものはない;人間性の理想的なパターンなどはない;何にかひな型があって、それに型どって人間が造られたとか、それを努力目標にするとかということもない。このようにして、科学は人間を好き勝手に再構成できるとか(あるいは、実際にそうするとか)、自分の選んだライフスタイルで生きるのは個人の自由だとか言うのです。

宗教の世界での最近の傾向は、こうした考え方に危険なまでに近づいてきています。それは「関係神学」と呼ばれているもので、次のように言い切っています:われわれは物事の本質など考える必要はない;神や人間でもそうだ;問題は関係ということだ。最近のある演説者がこうした考えを支持して言いました、「聖書が神や人間について定義する仕方は本質といった抽象的なものによるのではなく、相互の関係によってなのだ」。

こうしたアプローチについては強く反対しなければなりません。この見解は聖書の教えよりは現代の風潮をむしろ反映しているようです。それはどちらにもとれるような論理的ペテンという誤った選択肢で私たちを欺くのです。私たちは「本質か関係か」というような選択をする必要はないのです。聖書は両方をとっているのですから。

聖書には人間の本质や性質とか、人間存在の本質が何なのかということについて、ありあまるほどの言及があります。本章ではこの点についての教えを要約してみましょう。

### 人間を形づくるものは何か?

よく知られている西洋の童謡に「子供は何でできてるの?」と問いかけているものがあります。歌の中での答はまったく取るに足らないものですが、この質問自体はこの場にうってつけのものです。人間は何で「できている」のでしょうか。ここで問題にしているのは身体のいろいろな化学的成分とか、骨や筋肉といった身体の諸部分や、それらをどう組み立てるかということについてはありません。むしろ、物質的肉体と霊というもっと広い構成要素について考えているのです。

#### A. いくつかの選択肢

選択肢にはどのようなものがあるでしょうか。霊と物質という二つの構成要素について考察を進めている以上、三つの選択肢しかありません:

- (1)人間は霊だけである
- (2)人間は物質だけである
- (3)人間は物質と霊の両方である

これらの三つの見解にはそれぞれ擁護者たちがいます。

## キリストの真理

人間を霊だけとする見解はごくわずかしかお目にかからないものの、大部分の西洋人が考えている以上に広まっている考え方です。たとえば、メアリー・ベイカー・エディー（訳注：クリスチャン・サイエンスという一派の創始者）はぶっきらぼうにこう言っています、「人間は物質ではない、霊である」。彼女は人間の肉体を含む物質そのものを、本当は存在していないのだとするのです。こうした見方は東洋の宗教、たとえば、ヒンズー教などにはごく普通に、そこでは物質はマヤ（幻想）だと見られています。人間の霊のみが人間の本質であり、それはいつかとも出てきたところである大宇宙霊に還ってゆくのだというのです。

クリスチャンであっても、もし身体の重要性を軽視して、「人間の霊が人間の真の姿であって、重きをなす部分だ」と言うならば、この誤った考えに危険なほど近づいていることになります。霊は確かに重要な部分ですが、唯一の部分ではありません。

人間が物質だとか肉体のみだとかする見解は、現代ではかなり一般的になってきています。一般の物質主義者たちがこうした見解を擁護しても別に驚くには当たりません。というのも、彼らは神であろうが天使あるいは人間であろうが、霊的存在といったものはどんなものでも否定しているからです。しかし、この見解は宗教の世界にも広まっています。人間には魂や霊といった霊的実体などないというのがいくつかの有力な異端派の主要教義になっています。何人かの現代の自由主義的なクリスチャンも「転倒したギリシア哲学」ではなく、「本当のヘブル思想」に従っているのだと言って同様のことを説いています。実際は、彼らは聖書の教えよりも一般の物質主義の道をとってしまったのです。

他方では穏健な牧師や教師のかなりの人々がこの「肉体のみ」の見解に傾いていっているように思われることは警戒すべきことです。彼らの意図は「霊オンリー」傾向での行き過ぎを是正することなのですが、ミイラとりがミイラになってしまって、聖書の真理が択一的聖書解釈と誤った選択のうちに失われてしまっているのです。

人間は肉体と霊の両方だと言う伝統的見解のみが聖書の教えと合致するものです。それではこの見解を見てゆきましょう。

## B. 肉体と霊

聖書は人間の物質的性質について言及するに際し、さまざまな用語を使っており、その中には、刀の鞘（のようなもの）、人間の外側、身体、肉体といったものも含まれます。肉体(flesh)という言葉は注意すべき重要なもので、特にパウロの著作ではほかに言外の意味の含まれていることがしばしばあります。[ローマ 8:1-13](#)とか[ガラテヤ 5:16-21](#)といった箇所では、この言葉は身体そのものではなく、かつての罪深い自分とか、罪深い生き方を指しています。このように「肉体」は新しい生命や生き方の源である聖霊と対比して考えられています。

(ローマ 8:1-13)

1 こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない、2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである、3 律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった、すなわち、御子を、罪の肉の様に罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである、4 これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである、5 なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである、6 肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである、7 なぜなら、肉の思いは神に敵するからである、すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである、8 また、肉にある者は、

## キリストの真理

神を喜ばせることができない、<sup>9</sup> しかし、神の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。<sup>10</sup> もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。<sup>11</sup> もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かして下さるであらう。<sup>12</sup> それゆえに、兄弟たちよ、わたしたちは、果すべき責任を負っている者であるが、肉に従って生きる責任を肉に対して負っているのではない。<sup>13</sup> なぜなら、もし、肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬ外はないからである。しかし、霊によってからだの働きを殺すなら、あなたがたは生きるであらう。

また人間の霊的性質についてもいくつかの用語があり、その中には心、人間の内側、霊、魂などがあります。(魂と霊は異なるものだと考えている人たちがいます。[1テサロニケ 5:23](#) や [ヘブル 4:12](#) といった箇所がそう見られるというのです。たとえ違いがあったとしても、聖書ではほとんど注意すべきほどのものでないことは確かですから、私たちはそこから拡大解釈的な神学上の結論を引き出そうとすべきではありません。こうした箇所や聖書全体についてのより良い理解として、魂や霊という用語が人間の霊的性質について述べるために用いられているときは同義語と解すべきです。)

人間の性質が物質的要素と霊的要素からできているということは、私たちが旧約聖書と新約聖書の両方を読むときに圧倒的に受ける印象です。[ダニエル 7:15](#) には文字どおり「私の霊はその体内で悩んだ」と書かれています。伝道 12:7 にはこうあります、「ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る」。旧約聖書はまた人間を心と肉体として描いていますし([エゼキエル 44:7,9](#); [伝道 11:10](#); [詩篇 16:9](#))、[詩篇 63:1](#) は魂と肉体としています。[詩篇 31:9](#); [エゼキエル 21:7](#); [イザヤ 10:18](#) 参照。

この点については、新約聖書の方がよりはっきり言っています。人間は霊と肉体からなる([マタイ 26:41](#); [2コリント 7:1](#))、また霊と身体からなる([ローマ 8:10](#); [1コリント 7:34](#); [ヤコブ 2:26](#))、また魂と身体からなる([マタイ 10:28](#))。パウロは外なる人と内なる人とを対照させています([2コリント 4:16](#); [1ペテロ 3:3,4](#))。イエスはマタイ 10:28 にあるように、魂と肉体は別々のもので、分離し得る実体であるとして次のように言っています、「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のある方を恐れなさい」。人が肉体的に死んでも霊は生き続けます([黙示 6:9](#))。そして復活の時に新しい霊的身体を受けるのですが、それまではそれを「着ていない」状態にあるのです([2コリント 5:4](#))。

ヘブル語やギリシア語の鍵になる言葉が一つ以上の意味を持っているということが、いくつかの混乱の原因になっています。たとえば、霊と訳されている言葉は同時に「息」や「風」をも意味します。しかしこのことは常に「息」と「風」のどちらかを意味するのだとは限りません。(聖霊のことを「聖なる吐息」などと言わなければならない羽目に陥りかねません)。同様に、魂と訳されている言葉にもほかの意味があって、とくに「命」([ヨハネ 10:11](#); [マタイ 16:25](#))「人」あるいは「者」([使徒 2:41](#); [ローマ 13:1](#))となっていることもあります。しかし前にも言ったように、これらは単に意味の問題ではありません。文脈によってのみ、その魂に当たる語が、実際は「命」であるか「人」なのか、あるいは「霊的性質」なのかが分かるのです。ある箇所ではその語は「霊的性質」しか意味し得ないとしても([マタイ 10:28](#); [黙示 6:9](#))、上述した箇所では「命」や「人」と訳す方が適切なのです。

結論的に言えば、人間は二元的存在であり、それは神の配剤により物質的要素と霊的要素との両方からなるのです。いずれも人間の本質をなす重要なものであり、もし一方が欠けてしまえば、人間はその全性を失うのです。

### C. その意味する事柄

人間の二元的性質は数々の重要なことを意味しています。第一に、人間が肉体からできているということをあげましょう。人間は死ぬべからざる肉体を持って創造されたのです。人間の肉体はもともと良いものであり、かなり広まっている異教が教えているような、悪いものとか、合い容れぬものとか、偶然のものとかではありません。肉体は処罰手段ではなく、「霊という真の自分」が逃れようと思っているテントとか監獄とかでもありません。肉体は私たちの本質そのものの一部分であり、神が永遠に持つようにと望まれ、また備えてくださったものなのです。

第二に、人間は霊です。私たちには明らかに非物質的な面があり、それが私たちを物質界の他のいかなる物とも区別しています。人間は動物とは質的に異なっています。霊としての私たちは霊である神に似ています。しかし、この点についてはよくよく注意しなければなりません。私たちの霊は神のようではありませんが、神ご自身のようではないということです。神おひとりが被造物でない霊であり、人間と天使たちは神によって造られた霊なのです。他の宗教とは異なって、人間の魂や霊は神の霊の一部分ではありません。つまり、神性を持ってはいないのです。その意味するところは、人間の魂はもともと不滅でも永遠でもないということです。魂は神によって創造されたものであり、もし神が消し去ろうとすればそうできたのです。(しかし、神はそうした選択をされませんでした。)私たちは魂について「不滅」か「無」かといった選択をする必要はありません。そんなことをするのは「存在するのは肉体のみ」などと言い張る人々の犯す誤りです。

第三に、人間は肉体と霊とが融合した存在だということです。両方があってはじめて人間は人間になるのです。この融合性からいくつかのことが出てきます。

1. 肉体と霊は互いに敵対するものではありません。両者を結びつける第三のもの(霊からわざと区別した魂など)は必要ないのです。
2. 人間は肉体であって、かつ霊です。どちらも本当の人間です。
3. 罪の結果は人間に全的に、つまり肉体と霊の両方に及びます。
4. 死は当たり前のことではありません。なぜなら、それは霊と肉体が分離して人間の全体的状態を壊すからです。いわゆる「中間状態」(死後、霊魂が消滅することも眠ることもなく、天国または地獄に行って終末の日を待つ状態)も完全なものではありません。
5. 救いは人間の肉体と霊との両方に全的に及びます。人の霊のみが救われるものではありません。肉体も贖われるのです([ローマ 8:23](#))。
6. 肉体と霊の融合である人間は、神とこの世の両方にうまく結びついてゆけるように神がしてくださいます。私たちは物質ですから、宇宙が私たちの住む環境です。しかし、同時に霊でもありますから、宇宙を治める立場にあります([創世記 1:26-28](#))。他方で、霊としての私たちは神を拝し、神と交わるということも自然にできます。ただし、肉体を持った私たちの礼拝は物質的手段(たとえば、パンとぶどう液、あるいは楽器など)を持って行うということも当然のことです。

## ・「神のかたちに」

人間が「神のかたちに」([創世記 1:26,27](#)) 創造されたということは、人間の性質に関する聖書のユニークな視点です。このことはいったい何を意味しているのでしょうか？ 基本的には私たち人間が人格を持っているということの意味しています。人格は霊的存在の本質です。霊的存在は人格的存在です。この点で私たちは神に似ているのです。神は霊であり、私たちも霊です。神は人格であり、私たちも人格です。

人間として私たちは人格的な交わりを持つ能力がありますが、それは人間相互のみならず、神ご自身と交わる能力でもあるのです。これが神のもっとも望んでおられることです。そのために私たちは神の形に造られたのです。ですから、神との正しい関係にあるときこそ私たちは人間の創造の目的を果たしているのです。

このことからいくつかのことが分かります。第一に、すべての人間には生まれもった尊さと意味と価値があるということ。これは高い地位にある人のみならず、どんな低きにいる人でも、みすばらしい人にも真理です。これが自分を大切にしなければならないということの根拠です。

第二に、人命は特に尊重すべきだということ。シュバイツァーはどんな生命でも尊重すべきだと言っていますが、これは人命と他の生物の命の間には質的な違いがあるということを見過ごしています。神の律法が保護しているのは人間の生命のみです([出エジプト 20:13](#))。人間が神の姿に造られたということは、殺人を許すべからざる犯罪とし、死刑を正当とする根拠になります([創世記 9:6](#))。

最後に、失われた人々への伝道に誠実を尽くすべきこと。人が救われずに死ぬということは、神の姿に造られた人間が永遠に地獄に住むということです。こんな悲劇があってもよいのでしょうか！

## 第5章 罪についての真理

創世記 1:31 を読んでみましょう。「神が造ったすべての物を見られたところ、それははなはだよかった。」歴史の本をどんなものでもいいですから読んでみて下さい。バビロニアやローマがエルサレムを包囲したときの恐ろしい出来事とか、ナチやカンボジアでの大量虐殺とかを読むと、これが「はなはだよい」ことだろうかと思います。

新聞を手にとってみると、最近起きている戦争や大量殺人、拷問死などが載っています。アルコール中毒、覚醒剤中毒、売春、テロリズム、囚人の激増、何百万もの堕胎。これが「はなはだよい」ことでしょうか？

明らかに何か間違っています。私たちが見ている世界は神が「はなはだよい」といわれた世界とは確かに違います。歴史を暴力と流血と汚れとで埋めた人類は、あのエデンで主の恵みを受けた完全な二人とはまるで違っています。いったい何が起きたのでしょうか？その答は私たちの世界に何かが入り込んで、内部の内部までめっちゃめっちゃにしまったということです。そして、その侵入者こそ罪です。それが創世記第3章に記録されているように、アダムとイブの心を通して入って来て、それ以前とはまったく何もかも違ったものにしてしまったのです。

罪についての正しい理解は非常に大切なことです。特に罪が私たちにどんな影響を及ぼしているかを知ることは重要です。罪がもたらした苦境がどんなものであるかを知る必要があります。本章ではこのことに焦点を当ててゆきましょう。

### ・ アダムの罪

「罪がどのように私たちに影響を及ぼしているのか」との問は、「誰の罪が私たちに？」と考えるとさらに複雑になってきます。単に自分の罪と取り組むのか、あるいは始祖であるアダムとイブから何かありがたくないものを受け継いでいるのでしょうか？ここに「原罪」という重要な問題が関わってきます。アダムの原罪(=アダムとイブの罪を縮めた言い方)が人類全体に何らかの影響を及ぼしているのでしょうか？この質問には実にさまざまな答があります。そのいくつかを見てみましょう。

#### A. さまざまな見方

一つの極端な見方をする人は、アダムの罪が私たちの住む環境を変えたという点で、間接的にのみ影響を及ぼしたにすぎないと言います。罪が私たちをとりまいていて、彼のまねをする事によって罪びとになるということです。また、別な見方としては、アダムの罪が全人類に肉体的死という呪いをもたらしたが、このことは私たちの霊的状态には何等の影響をも及ぼしてはいないとします。つまり、私たちは死すべきものとして生まれてきてはいるが、アダムをまねて罪を犯すまでは無実で清いということです。(この見方と前述の見方はペラギウス主義と呼ばれる説です。)

更に別な見方としては、人間はアダムの罪の故に肉体的に死ぬけれども、それはアダムのとがを受け継ぐからではなく、人間が生まれるときは無実だとします。ただ、私たちがアダムから受け継いでいるのは傷ついた、罪を犯し易い傾向で、こうした部分的欠陥が罪を犯させるのであって、必ず罪を犯すとは限らないということです。(これは

## キリストの真理

半ペラギウス主義と呼ばれます。)

伝統的なローマ・カトリックはこの見方をさらに広げてアダムの罪のために、人は生まれる以前から罪と永遠の処罰が定められているとしています。

最も極端な見方は紀元5世紀はじめにアウグスチヌスによって始められました。(このため、アウグスチヌス主義、また時にはカルビン主義と呼ばれます。)それは原罪に関するまったく古典的なものです。この見解によると、全人類がアダムから受け継いだのは肉体の死だけではなく、霊的問題すべてであるということです。第一に、すべての赤ん坊は罪をもって生まれて来、そのままでは地獄に行くしかない。第二に、子供はすべて生まれながらにして霊的に欠陥をもっている。第三に、この欠陥性はすべての面に及ぶので、幼児には自由意志がない。そのため成長しても善を選び取ることができない。この最後の点は「全面的墮落(total depravity)」あるいは「意志の束縛(bondage of the will)」と呼ばれます。聖書を信ずるルーテル派やカルビン派(長老派と改革派教会)はこの見解に立っています。

### B. ローマ 5:12-21

#### (ローマ 5:12-21)

12 このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。

13 というのは、律法以前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪として認められないのである。

14 しかし、アダムからモーセまでの間においても、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者も、死の支配を免れなかった。このアダムは、きたるべき者の型である。

15 しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。

16 かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果とは異なっている。なぜなら、さばきの場合は、ひとりの罪過から、罪に定めることになったが、恵みの場合には、多くの人の罪過から、義とする結果になるからである。

17 もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあつて、さらに力強く支配するはずではないか。

18 このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。

19 すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである。

20 律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。

21 それは、罪が死によって支配するに至ったように、恵みもまた義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより、永遠のいのちを得させるためである。

興味深いことに、以上のどの見解も自説を聖書の正当的教えだと主張しています。しかもほとんどのものが自説の根拠を同じ聖句、つまりローマ 5:12-21 に置いています。そこではパウロが次のように言っています、「一人の人によって、罪がこの世に入り、また罪によって死が入ってきた」(12節)。また「一人の罪科によってすべての人が罪

## キリストの真理

に定められた」(18節)。さらに「ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪びととされた」(19節)。

これらの聖句について、ある人は肉体的の死のみを指すと解し、他の人はある種の欠陥性を指すと解しています。アウグスチヌス主義の人々はここをさまざまな要素、つまり、肉体的死、霊的死(彼らのいわゆる全面的墮落)、それに永遠の死(墮地獄の定め)がひとまとめにされたものと見ます。

パウロがこの難解な聖句で本当に教えようとしたことは何なのでしょうか？少なくとも言えることは、私たちがアダムの罪の故に肉体的に死ぬということです。しかし、それ以上のことを言おうとしているのでしょうか？18,19節の「定め」とか「罪びと」とかいう言葉は、罪性や欠陥として私たちがそれらを受け継いでいるという意味なのでしょうか。この点については「そうかも知れないし、そうでないかも知れない」と答えるしかありません。しかし、こんな重要な問題に対して、どうしてそうもあやふやであっていいのでしょうか？その理由は、良く考えてみると、結局どうでもいい問題だということが分かるからです。つまり、人類がアダムから何を受け継いだにしても、それらはイエスキリストの贖いのわざによって取り除かれ、消し去られた以上、問題ではないのです。そのことがこの聖書箇所、特に15-19節の要旨です。A.I.ホップスはこのことを次のように簡潔にまとめています。「私たちの意志や同意にかかわらず、最初のアダムにおいて失ったものは、私たちの意志や同意にかかわらず、第二のアダムにおいて回復され、またはされるだろう」。

私たちはアダムの罪の故に死ぬのでしょうか？そんなことは問題になりません。なぜなら「キリストにあってすべての人が生かされる」(1コリント15:22)のだからです。アダムの罪によって全人類に罪性や全面的欠陥性が潜在的にふりかかったのでしょうか？それも問題になりません。それらはキリストの「ひとりの義なる行為によって」(ローマ5:18)全人類のために解消されたからです。そのことは罪の結果が現れる以前に、また十字架以前に生きていた人々にも及ぶのです。

こうして最終的に分かることは、誰もアダムの罪によって定められた結果について苦しむことはないということです。キリストの贖いのわざはアダムの罪のすみずみまで解消したのです。私たちが今、罪性や欠陥をもっているとすれば、それは私たち自身の罪によるものであって、アダムの罪の故ではありません。復活による贖いによって、私たちに肉体的死が無くならないとすれば、それは私たち自身が個人的罪をまた積み上げてしまった結果です。しかし、主は讃むべきかな、キリストの救いの恵みはこれらすべてをも包んでくださいます。これがパウロが「まして」(15,17節)という言葉で強調していることなのです。

## ・ 個人の罪

このようにして問題となるのはアダムの罪ではなく、私たち自身の罪の結果です。個人の罪は私たちにどのような霊的影響を及ぼしているのでしょうか？それはふたつの根本的問題を引き起こしています。

### A. 私たちの罪は私たちがとがありとします

神に対する個人的罪の第一の結果は、私たちがとがのある者となった事です。罪を定義すれば、無法ないし「不法を行うこと」(1ヨハネ3:4)です。法の命令に違反すれば、法の定める処罰にあうことは当然です。罪は犯しうる最も深刻なものですから、罰も永遠の地獄という想像しうる最も重いものなのです。神の法を破ることは神に対する

## キリストの真理

個人的反逆です。それは神の知恵と権威に対する侮辱です。

このように、第一の問題点は法的なものです。罪は私たちを神の法との正しくない関係に引き込みます。私たちは法的に問題ある者となります。神は変わる事のない正義の方ですから、法の完全無欠さを保つために、処罰を科さざるをえないのです。裁判官は「有罪！」といて判決を下します。それは裁き、怒り、処罰、非難、破滅、死を意味します。

ここで思い起こしておくべきことは、このとがが私たちがアダムから受け継いだものではないということです。赤ん坊はとがあるものとして生まれてくるわけではありません。私たちがとがの故に処罰を受けるべき者となるのは、神に対する罪とはどういう意味なのかということが分かるほどの年齢になってからのことです。そのときに私たちは、ほかでもない自分が罪に対して責任ある者となるのです。エゼキエル 18:4 はこの個人責任の原則を「罪を犯した魂は必ず死ぬ」とはっきり言っています。各人は(誰かほかの人ではなく)自分自身の行動に応じて報いを受けます。[詩篇 62:12](#); [ローマ 14:12](#); [2 コリント 5:10](#) を参照してください。

### B. 私たちの罪は私たちが病める者となります

まるで罪の結果がとがありとするだけでは足りないかのように、もう一つの罪の結果があります。それは、霊的に病むということです。つまり、墮落していること、弱いこと、欠陥があること、罪深いことです。罪びとと魂(心、霊)は罪によって病気にかかっています。このように罪は私たちを神と神の律法との正しい関係から墮落させたのみならず、私たち自身の本性をも墮落させたのです。パスウェルは「私たちの行動のみならず、存在そのものも罪なのだ」と言っています。罪と罪を犯す人のいずれもが罪深いのです。

イエスが木とその実(つまり、私たちの本性と行い)の両方が悪いと言ったのは([マタイ 7:17](#); [12:33-35](#))、このことをはっきりさせたのです。彼は悪い「人」のことを言っているのであって、単に悪い行いのことを言っているのではありません([マタイ 5:39,45](#); [12:34,35](#))。この墮落は心の中(人間の内側、霊)でのことです。「心はよるずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」([エレミヤ 17:9](#))。身体の病気は私たちの魂の状態のたとえによく使われます。[イザヤ 1:5,6](#); [ローマ 3:10-18](#) 参照。

この病気は非常に重く、「死」とか「魂の死んだ状態」と呼ばれています。[エペソ 2:1,5](#); [1 テモテ 5:6](#); [ユダ 12](#) を参照してください。(エペソ書では、私たちが自分自身の罪によって死ぬのであって、アダムの罪によるのではないと書かれていることに注目してください。)

これはどういうことを意味しているのでしょうか？それは私たちが罪を犯せば犯すほど、ますます罪を犯さないようにすることが難しくなるという意味です。私たちの魂には悪意や情欲・ねたみ・貪欲・憎しみといった、あからさまな醜さがはびこっていて、それらから逃れられるとはとうてい思えません。私たちの意志は弱くて誘惑に打ち勝つことができませぬ。心は神に逆らってかたくなであり、神の真理に対して盲目です。マギービーが「罪の結果としての絶望的弱さ」と呼んでいますが、このため私たちに神を喜ばせる力がなくなっています。私たちは罪の虜です。

ある人々はこの罪深い状態を表すのに「墮落」という言葉を用います。唯一の問題はほとんどの人々がこのことばをアウグスチヌスの「全的墮落」の考えと結び付けてしまうことです。この「すべての人はアダムの罪の結果絶対的に墮落した」とする考え方はすでに退けました。しかし、その問題を別としても、依然として多くの人々が罪びとの全的墮落は聖書の教えだと言います。

## キリストの真理

私たちはこの見解は誤りだと信じます。この考え方がキリスト教思想の中にあることだけで、ずいぶん悲惨な結果を引き起こしてきました。従って、ここでその誤りを簡潔にのべておきましょう。

そのような見方をする人々にとって、全的墮落とはある人々が墮落することが可能だから墮落しているということの意味していません。全的墮落が意味しているのは、その人の一切が墮落しているということです。つまり、その人の考えや感情、意志などのすべてです。キーポイントは意志が束縛を受けているという点です。その結果、人間は神の目からみて、良い行いをする事がなにひとつ「絶対不能」だということです。特にこの見方をする人々は、罪びとは福音に応答することができず、信仰と悔い改めのうちに神のもとに立ち帰ることができなくなっていると言います。その人の墮落がこうしたことを不可能にしていると言うわけです。こうして罪びとはまず神が彼を回心(心を入れ替えること)させるのでない限り、自分からは決して信じることも救われることもできない--つまり、罪びとである人間には選択権もないし、自分から決心や信仰を持つこともないということです。

この思想を示していると考えられている聖書の箇所は、実はそんなことを教えているのではありません。たとえば、この見方の正しさを証明するものとして使われている[エレミヤ 19:9](#)とか[エペソ 2:1](#)は、確かに罪びとは病気にかかっていて墮落していると教えてはいます。しかし、墮落しているということと全的墮落とは同じものではありません。

他の箇所、(たとえば、[ローマ 8:7,8](#); [エレミヤ 13:23](#))にも確かに罪びとはよい行いをする事はできないと書かれています。それは人間的な努力で良い生き方をしようとする事のむなしさを指しているのであって、信仰のうちに神に帰ることも不可能だといっているのではありません。信仰が「なければ」神を喜ばせることはできません([ヘブル 11:6](#))。このように、キリストを信じまいとする限り、また罪深い事柄に気を取られている限り、どんなことをしても神の前によい人間ではありえません。しかし、そのような人でも神の約束を信じ、従う力を与えられることによって、神のもとに立ち帰ることができるのです。それでは「父が引き寄せてくださらなければ、誰も私にくることはできない」([ヨハネ 6:44,45](#))という聖句はどういうことでしょうか？確かにその通りですが、これは何か秘密めいた神の選びの過程をいっているのではありません。それは福音の力によって成し遂げられることです([ローマ 10:17](#); [ヤコブ 1:18](#); [ヨハネ 12:32](#))。福音が書かれたという目的のひとつは、まさに信仰に導くためなのです([ヨハネ 20:31](#))。神は罪びとを本当に引き寄せてくださいます。しかしそれは人類すべてに対してであって、しかも人間が拒もうと思えば拒むことができるのです。

それでは信仰や悔い改めも賜だというのはどういうことでしょうか？(参照[使徒 5:31](#); [11:18](#); [13:48](#); [ピリピ 1:29](#); [エペソ 2:8,9](#) その他)。ある意味で信仰は神からの贈り物だといえます。それは神が私たちに信じ悔い改める「機会」を与えてくださるからです。しかし、贈り物が必ずしも受け取られるとは限りません。ある人は受け入れ、ある人は拒絶します。贈り物は特定の人だけに贈られるのでもなく、また拒絶し得ない形で贈られるものでもありません。厳密な意味で、信仰も信じる能力も特別な賜ではありません。( [エペソ 2:8,9](#) を注意深く調べてみると、ここでいう「神の賜」は信仰をさしているのではありません。このことは初級ギリシア語文法を知っているだけでも分かることです。)[訳注:「信仰」も「恵み」も女性名詞ですが、「神の賜」を含む文の主語は中性単数名詞です。従って「あなた方が救われたのは...神の賜」となるのであって、「恵みと信仰が...神の賜」となるのではないという意味です。]

全的墮落説が誤りであることを示している鍵になる聖句は[コロサイ 2:12](#)です。そこでは洗礼の時に私たちは「信仰によって」「よみがえらされた」(=新しく生まれる、再び生まれる、生かされる)とあります。このことによって分かるのは、聖霊が私たちに新生させる前に、すでに信仰が与えられているということです。信仰が新生に先立つこと

## キリストの真理

になっています。これは新生が信仰に先立たなければならないとする全的墮落の考えとまったく正反対です。全的墮落説を退けるあまり、次の事実を見失わないようにしましょう。それは私たちが自分の罪によって、いわば病気(これが墮落ということ)になっているということです。それも部分的ではありますが重度のもので、罪の結果ですから有罪です。この病気で有罪であることが、私たちがかかえている「二重苦」と呼ばれるもので、贖罪によって解決されるべきふたつの問題点です。

## 第6章 死に関する真理

プラスチックの切れ端や石ころなどは生きてはいませんが、かといって「死んでいる」とも言いません。そうしたものは生きていたことがあるわけではないし、またいつか生きるというものでもありませんから、それらについて生命がどうのこうのと言うことは的はずれなことです。

何かが死んでいるという場合、それは通常ならば生きていくべきものについて言っているわけです。死とは生命の無いこと、つまり生命原理からの離脱、あるいは、命の源から切り離されてしまっていることです。

人間が生きるべきものとされていることは明かです。生ける神は人を「生きた者」([創世記 2:7](#))として造られました。それは人がその創造者と仲良く永遠に生きるという目的のためだったのです。しかし、罪が入り込んできたとき、死も入り込んで来ました([創世記 2:17](#); [ローマ 5:12](#))。生きるべき人間が死すべき人間となったのです。実に「罪の報酬は死」です([ローマ 6:23](#))。ただこれらの報酬はいくつかの異なった通貨で支払われます。つまり、それは死ですが、**死には全部で3種類あります**。

第一は肉体的死です。人間とはもともと霊と肉体とが一体となっているべきものです。このふたつのものが一体となっている限り肉体は生きています。人間の霊は肉体的生命の源です。ヤコブ 2:26 には「靈魂のない体は死んだものである」と書かれています。肉体的死は霊が体から離れるときに起きます([ヨハネ 19:30](#) 参照)。

第二は霊的死です。これは前の章で扱った霊的墮落ということと同じで、[エペソ 2:1,5](#) や [コロサイ 2:13](#) が「死」と言っている状態です。罪びとの靈魂は真の意味で死んでいます。なぜなら、生命の源である神ご自身から隔てられているからです([エペソ 4:18](#))。罪びとは神から隔てられている状態にあり([イザヤ 59:2](#))、その霊的生命は失われています。(神のもとに立ち帰り、回心する時にその人は再び生きた人となるのです。[エペソ 2:5](#))。

第三に永遠の死があります。裁きの日には有罪宣告をされた罪びとは、肉体も靈魂も([マタイ 10:28](#))永遠に火の燃える池の中に投げ込まれます。これは「第二の死」とも呼ばれているものです([黙示 20:14,15; 21:8](#))。この死の本質は消滅することでも無存在となることでもなく、むしろ神から永遠に切り離されることであって、それは修復不能なのです([マタイ 7:23; 22:13; 25:41; 2テサロニケ 1:7-10](#) 参照)。

ただ本章では、こうした聖書の教えのひとつである肉体死にのみ焦点を当てることを心に留めておいてください。ここではどのように肉体の死が罪への罰として、あるいは恐れるべき敵として、またイエス・キリストによって打ち負かされた罪としてのべられているかを見ることにしましょう。

### ・ 死は罰であること

#### ・ 死は敵であること

「どうして人間は死ぬのか？」この問に対する現代人の答は「当たり前じゃないか。人間以外のあらゆるものも死ぬのだから」というものです。

この答が立っている前提は、人間が他のものすべてと同様に自然の秩序の一部だということです。これはいわば

[トロイの馬伝説的進化論](#) (の残り滓) です。つまり、人間の生命は他の生物と同じ過程で進化してきたとか、従って人間の死は昆虫や象が死ぬように自然のことだということです。

教会のリーダーたちでも、往々にしてこのような死に対する見方をすることがあります。聖書信仰に立つクリスチャンからさえも、死は自然のものだから罪の結果ではないなどと聞かされることがあり、ある人は「死すべき運命は罪とは無関係で、天地創造のはじめからのきまりだ」など書いたりしています。

これはとんでもないことです。聖書は、人間の肉体の死は罪の結果であってむしろ罰だ、とはっきり教えています。はじめにアダムとイブは警告を受けました：もし従わないならばあなたは「きっと死ぬであろう」([創世記 2:17](#))。ローマ 1:32 でパウロは罪を行うものは「死に価する」と言っています。

またパウロは死が罪の報酬であり([ローマ 6:23](#))、「からだは罪の故に死ぬ」([ローマ 8:10](#))と言っています。ヤコブ 1:15 は死の由来を次のようにのべています：「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す」。

[ローマ 5:12](#) は死がひとりの人アダムを通してこの世に入り、また全人類に広がったと説明しています。つまり個人は自分が犯した何らかの個人的罪への罰として死ぬのではないということです。それは人類という種族全体への呪いですから、乳幼児や聖人であっても死ぬのです(個人がキリストの贖いによって、死からよみがえらされるかどうかは、その人が個人的に犯した罪からキリストによって救われているかどうかにかかっています)。

いずれにしても、人間の死が自然でも普通のことでもないということはきわめて明かです。人間は他のもののように自然に死んで行くものとしては創造されなかったのです。罪が入ってきたばかりに、死の運命が人類にふりかかったのです。それは罪に対する処罰です。

こう言うときよく出される反論は、これらの聖書箇所が述べているのは、霊的ないし永遠の死のことであって、肉体の死についてではないのではないかというものです。確かにそうした死ということも考慮に入っているとは思いますが、これらの聖書箇所が肉体の死を含まない意図だと考えることは無理です。たとえば、[創世記 2:17](#) では従わなかったことに対する罰は死です。そしてこの罰が科せられたときの([創世記 3:19](#))、そこに記されている唯一の死は肉体の死です。[ローマ 5:12](#) を分脈全体の観点(たとえば[ローマ 6:9](#))から読んでみると、肉体の死が考えられているのが分かります。[ローマ 8:10](#) は特に罪に対する肉体の死が述べられています。

救いということについてちょっと考えてみてもそのことは分かります。たとえば、肉体の復活が贖いの業だということ([ローマ 8:23](#))、肉体の死が罪の結果だということを示しています。また、もし肉体の死が自然なことであるなら、どうして十字架上のキリストの死は呪いなのでしょう？ [ガラテヤ 3:13](#); [ヘブル 2:14,15](#) 参照。

人間は罪の故に死にます。このふたつのことが関係ないなどという悪魔の嘘([創世記 3:4](#) 参照)にたぶらかされてはなりません。

人が死ぬとき、それは単に「自然に起こるべきことが起きている」ではありません。むしろ、その人は母の胎内に生を受けたときから追跡してきた、ある侵入者の攻撃を受けて、打ち負かされたのです。その人は(少なくとも一時的には)この死という冷酷な敵に破れたのです。

死をこのように敵--それも恐れ、戦い、また打ち勝つべき敵--と考えることは正しいことです。[ヘブル 2:14,15](#) はサタンについて「死の力を持つ者」と言っていますし、死自体に関しては、恐怖によって人間達を捕えるものと述べています。[マタイ 16:18](#) でイエスは教会を死の猛攻撃から私たちを守る避難所ないし砦であると言っています(ここで「ハデスの門」(新改訳)--死の場所--はその餌食を打ち負かす死の力を象徴しています)。[1 コリント 15:25,26](#) は



## キリストの真理

罪の贖いに関する出来事の一切は、-- それが霊的死であれ、永遠の死、また肉体的死であれ--死という問題に対する神の解決策です。キリストの救いの業は私たちを罰と束縛と死の恐怖から解放しました。これがキリスト教です。これが福音のすばらしさです。すでに打ち負かした敵を旧友などと誤解して福音の栄光を見失わないようにしようではありませんか。

## 第7章 恵みについての真理

「あなたはどうして自分が天国に行けると思うのですか？」

最後の審判ということについては、誰でも人生のあるときに、きっとあるとか、あるいは少なくともそんなことがあるかも知れないと思いをめぐらすものです。そのときに浮かぶ疑問は「自分は合格するだろうか？本当に天国に行くことが許されるだろうか？」ということです。

仮にその審判であなたが「どうしてあなたは自分が天国に行けると思うのだね？」と聞かれるのだとしてみましょ。あなたはどう答えますか？神はあなたにどのような答を期待しているでしょうか？どう答えれば神に「よろしい。それなら結構です。入ってください」と言われるのでしょうか？

これは救いの本質に関わる問題です。どのようにして人間は天国に行くことができる者とされるのでしょうか？天国が目的地とすれば、人はそこに着くためにどのような道をとるべきなのでしょう？天国を競技の勝者に与えられる賞にたとえれば、どのようにすれば勝つことができるのでしょうか？競技の勝敗を決める一般的ルールはどのようなものなのでしょう？これが「恵み」を一番よく理解することができる状況の前後関係です。

前2章で述べられた私たち人間の苦境において、私たちをこの状況から救うことができる計画を立てることは可能なのでしょうか？それは実は可能ですが、神の恵みによって事に当たるという条件付きです。恵みは救いの根本的性格をよく表しています。そして、救いは罪びとを天国に入れるための神の計画を理解するための鍵なのです。

従って、最後の審判でのあの重要な質問への正しい申し開きは、恵みの仕組みそのものからなされなければなりません。私たちは恵みということによって、考え方を整えてゆきましょう。ですから、恵みとはいったい何なのかを理解することはとても大切なのです。

### 恵み:与える心

まず指摘したい第一の点は、恵みが与える心だということです。ギリシア語で恵みという言葉が使われるのは、ふつう、喜びとか与えることと結びついているのが一番自然です。ある神学事典は、恵みの意味の始まりは「贈り物による喜び」にあると言っています。それは「人を喜ばす贈り物」であるわけです。

こうした意味は救いが恵みであることを見れば非常にはっきりしてきます。それは神が私たちを罪の結果から解放してくださる過程の本質を理解する手助けになります。救われていないことと救われていることとの根本的な違いを表しています。ローマ 6:23 は「罪の報酬は死である。しかし神の賜は、私たちの主キリスト・イエスにおける永遠の命である」と言っています。

ここで救われていない人の行き着くところ(死)と、救われた人の行くところ(命)が反対であることが分かります。しかし同時に、行き先決定についてのふたつの道ないし方法が、くっきりと対照的に示されているのが分かります。死は罪の報酬、つまり罪びとがその行いと生き方に応じたものを受けるとして描かれています。死はその人への報酬であり、負債であるわけです。これに対し、永遠の命は神からの無代価の贈り物と呼ばれています。それは何かの報酬ではありません。私たちにはそれを要求する権利がありません。それはただ贈り物という形のみ得

## キリストの真理

られるものです。これが恵みです。[エペソ 2:8](#) 参照。

これが恵みを理解する出発点です。それは贈り物に関係していることであって、自力獲得とか受ける資格とかとは関係ありません。「恵みにより」と「報酬として」は正反対のことなのです ([ローマ 4:4](#))。

### 恵み: 神の特質

贈り物としての恵みとは単なる抽象的な理論ではなく、また、箱やタンスの中にしまっておいて滅多に取り出さないもののような、親しみのないものでもありません。それはまず第一に、与える方の心の傾向として現実に存在するものです。それは態度であり、心のあり方であり、望みであり、**与えることを喜ぶ心**です。ここに「救いをもたらす神の恵み」([テトス 2:11](#) 新共同訳)が、それも神の心のまっただ中に始まるのです。すでにみたように正義も神の摂理です。その意味するところはつまり、「神は本当に私たちが当然受けるべきものをもって臨まれる」ということです。私たちは罪びとであり、罪の受けるべきものはとがめと怒りです。このようにして正義である神は私たちをとがめ、その怒りを私たちの上に注がれます。「神は人のわざに従ってその身に報い ...、全能者は裁きを曲げられない」([ヨブ 34:11,12](#))。 [ローマ 12:19](#); [エゼキエル 7:8,9](#); [ヘブル 12:29](#) 参照。

しかし神のご性質にはもうひとつの面があります。「焼きつくす火」である神が同時に愛と慈しみと恵みとにあふれた神なのです。実際、神の愛の摂理はある意味でその怒りをはるかにしのいでいます。それは神の恵みが、罪びとのために神の怒りから免れる道を備えたという点に表れています。神がお怒りになることは本当ですが、それが「最期の」言葉ではありません。「神は恵みを施すことを忘れ ...たであろうか」([詩篇 77:9](#))。いいえ、そんなことはありません。「主はあわれみに富み、恵み深く、怒ること遅く、慈しみ豊かでいらせられる」([詩篇 103:8](#))。「誰かあなたのように不義を許し、その嗣業の残れる者のためにとがを見過ごされる神があるろうか。神は慈しみを喜ばれるので、その怒りを長く保たない」([ミカ 7:18](#))。

その意味は、もし私たちが神の正義があまねく行きわたることに甘んじるならば、神は私たちそれぞれに応じたもの(罪の報い)をお与えになるということです。しかし同時に--実はこちらの方が本当のみこころなのですが--神は本来ならば私たちが当然身に受けるべき報いとは反対のものを与えることができになります。つまり、もし私たちがみこころにゆだねるならば、神は私たちに恵み深くありたいと思っておられます。(神は進んで受けようとする人)のみ恵みを賜います。[マタイ 23:37](#) 参照。)

これが恵みということの本質です。それはある意味で正義と反対です。私たちに受ける資格がないのにも拘らず、神は私たちを愛してくださいますし、その価値もない者なのに、私たちが自らの手ではどうにも手に入れることのできない救いをお与えくださいます。私たちが当然受けるべき報いではなしに、神は永遠の生命という贈り物をくださるのです。

### 恵み: 救いへの道

神の特性がふたつ(正義と愛)あることに呼応して、神との関係のあり方にもふたつあります。事柄を分かりやすくするために神が天に座っておられるとしてみましよう。その王座のある部屋にはふたつの窓があって、そこから神が全人類を見渡せるとします。一方は正義の窓で、この窓からながめられた人々はすべてその行動に応じたもの

## キリストの真理

を受けるのです。もう一方は恵みにあふれた愛の窓です。この窓からながめられた人々すべてが受けるものは贈り物であって、前者とは逆に、彼らにそれをいただく資格があって受けるものではありません。

ここで今述べているのは、実は天国に行くふたつの(可能な)道についてなのです。ひとつめは律法の道であり、ふたつめは恵みの道です([ヨハネ 1:17](#); [ガラテヤ 5:4](#); [ローマ 6:14](#) 参照)。律法の方式によるとすれば、私たちは神が正義の方であることによってつながりをもっていこうとすることになりますし、恵みの方式によるとすれば、私たちは神が愛の方であることによってつながりを持っていこうとすることになります。

「どんな理由であなたは自分が天国に行けると思うのか」という質問にどう答えるべきかは、天国に入るのが律法によるか、恵みによるのかということにかかっています。その違いはきわめて重要ですから、この点を明らかにしていきたいと思います。

### A. 律法による道

律法による救いの道を理解するのは難しい事ではありません。その基本原則がとても単純だからです:「律法を守れば罰を免れ、律法を破れば罰で苦しむ」。

ここで「律法」といっているのは、成典法規や神の掟をさし、どの時代に生まれたかは関係ありません。ある人が自分に当てはまる律法を守るならば、神の怒りを免れ救われますし、律法を破ればその人は罰で苦しむことになります。これが律法方式のはたらきかたです。

さて私たちは律法のもとに人生を始めること以外に選択の余地はありません。これが自然の状態です。誰でもきまりや特定の律法(たとえば、モーセ律法とか新約のきまり)を介して神との関係を持つべく生まれています。誰でも自分に当てはまる命令に、それを守るにしても破るにしても、応答してゆくことになります。

さて律法のもとでも救われることが理論上は可能です。基本原則が「律法を守れば、罰を免れる」とはっきりしているからです。従って律法の下では、もしきまりを守れば救われることができます。しかし、すべての律法を - しかも完全に - 守った人だけが天国に行く資格があります。たったひとつでも守れなければすべては水の泡になってしまいます。[ヤコブ 2:10](#); [ガラテヤ 3:10](#) 参照。

とすれば、一体誰かが律法によって(つまり、律法を守ることによって)実際、天国にゆけるといえるのでしょうか。いいえ、誰も行くことはできません。なぜなら「すべての人は罪を犯した」([ローマ 3:23](#))からです。このように、律法によってはひとりの人も救われることはないでしょう。律法によって神とのつながりを持つとするとする限り、私たちが期待できるものは、身に受けるべき当然の罰しかありません。

### B. 恵みによる道

福音の本体は神につながる道が実はもうひとつあるということ、つまり天国へのもうひとつの道-恵みによる道-があるということです。それはまったく異なった方式です。全然違った基本原理に基づいて働くのです。救いは次のように表わされます。「律法を守る人が罰を受け、律法を破る人は罰を免れる。」こういってすぐに反論が起こるでしょう。「ちょっと待った。どこか変だぞ。なぜ律法を守る人が罰を受けて、破る人が罰を免れるんだ? そんなのは不公平だ!」

## キリストの真理

まったくその通りです。公平ではありません。そんなことがあるべきではありません。これが公平だとすれば、恵みではないはずで、律法こそ公平で、恵みは公平どころではなくなります。

これに対してあるいは、こう言う人もいるでしょう、「それはそうだが、もうひとつの面はどうだろうか。文の後半に『律法を破る人は罰を免れる』とあるけれども、これはすばらしいのではないか。これは唯一の希望だ。それにしても前半の『律法を守る人が罰を受ける』というのはどうだろう。やっぱりひどい。どうしてこれが恵みなのだろう。」

確かにこれは奇妙に見えるし、反対したくなるでしょう。しかし、思い起こしてほしいのは、恵みとは私たちの普通の考えとは異なったものだということです。それは律法とか正義とか公平とかの枠内に収まらないのです。このことは特に前半部分に表れています。

ただし、これは恵みの恵みたるゆえんの本当に基本的な事柄です。この前提なしには他のなにものもありません。結局のところ、この前提は誰に当てはまるでしょうか。いったい誰が律法を完全に守ったのでしょうか？ たった一人、イエス・キリストしかいません。それなのに彼は律法を守ったにもかかわらず、罰を受けました。なぜでしょうか。それは恵みのためでした。恵みが生きて働くためには、とがめのない主が十字架につく必要があったのです。なぜなら、無実のキリストが死なれたということは、彼が私たちのすべての罰の身代わりに十字架上で苦しめられたことと、その結果本当の律法違反者である私たちが罰を免れることが可能になったことを示しているからです。

恵みによる救いは 2 コリント 5:21 に完璧に要約されています：「神は私たちの罪のために、罪を知らない方を罪とされた。それは、私たちが彼にあって神の義となるためなのである」。キリストは私たちの罪を取り、私たちは彼の義を受け取るのです。神がイエスを罪人のように扱われたのは、それによって私たちが罪のないもののように扱われるためでした。このようにして、神の正義はちょうど、罰金が支払われたように満たされ、神の愛も満たされたのです。

このようにして恵みのもとでは、私たちは罪を犯した者でありながらも、イエスの故に処罰を免れます。身に受くべき当然の報いを受けることはありません。わたしたちと神をつなぐものは律法ではなく、恵みです。神の愛の故に私たちはその怒りを免れるのです。(気をつけていただきたいのは、「律法--恵み」の区別は「旧約--新約」ということと同じではないということです。以上、ここでのべられたことはどの時代にも当てはまります。モーセ律法であろうと、新約の戒めであろうと、それらを守ることによって救われ得るような罪びとは誰もいません。)

神と律法によってつながるか、あるいは恵みによってつながるかは人それぞれの選択事項です。律法の下にとどまることを選択できはしますが、自分の行為に応じた報いを受けます。この人に神が「どういう理由で私はあなたを天国に迎えられようと思うかね？」と尋ねられたとき、その人はパリサイ人のように答えるでしょう：「私はあなたの掟のすべてに従いました」([ルカ 18:11,12](#) 参照) (このパリサイ人は裁きの日のための練習をしていたのでしょうか？)。この答はもちろん真実を言っていないが、律法遵守に望みをかけている人に、ほかにどう答えようがあるのでしょうか。彼はパリサイ人のように、義とされることがないでしょう([ルカ 18:14](#))。

この人とは反対に恵みを唯一の希望として持ち、あの取税人のように「神様、罪びとの私をお赦してください」(13 節)と答えてゆく道があります。これこそ神が私たちから聞きたいことなのです。なぜなら、これだけが神が私たちを救う道だからです。

## 第8章 イエス・キリストについての真理

ある人が「キリストという方こそキリスト教だ」といいましたが、まったくその通りです。聖書のメッセージ全体はイエス・キリストをめぐる、かつキリストに行きつきます。この方だけが福音を恵みにすることのできる方です。彼だけが私たちが罪のしがめから解放してくださいました。彼だけが死を征服され、彼だけがこの本でどんなことが書かれるにせよ、読まれるにせよ、それらを価値あるものにしました。

イエスに関する聖書の教えはキリスト教教理にとって頂点と土台の両方をなしています。それは最も崇高で栄光に満ちた聖書の教えであると同時に、聖書の他の教えすべてを支えている基盤でもあります。

スペースの関係もありますので、ここではふたつの基本的な質問に簡潔に答えることにしましょう。このふたつの質問というのは、イエスとは誰なのか？また、彼は何をした人なのか？ということです。(これらの事柄は「キリストの人となりとその業」とよばれています)。これらの質問に対しては、ペテロがピリポ・カイザリヤでした有名な信仰告白が簡潔に答えています：「あなたこそ生ける神の子キリストです」(マタイ 16:16)。

### ・ イエスはキリスト

クリスチャンなら誰でもペテロと同じように、イエスはキリストですと喜びをもって告白します。しかし、その意味はどういうことでしょうか？ギリシア語のキリストという語はヘブル語のメシヤという語と同じで、「油注がれたもの」という意味です。旧約聖書では油を注がれることは、特定の地位や仕事に任命されるということと同じでした。ですから、キリストとは神が救いの業をするために任命した者という意味です。イエスをキリストだと告白することは、神が世を救うために送ったのがイエスだということを受け入れることです。これがキリストの業についての告白です。

旧約聖書では、神はご自分の民に指導者を備えるに当たって、預言者、祭司、王という三つの役職を設けられました。これはやがてイエスがきて、彼の内にこの三つの役目を融合させるための準備でした。

#### A. 油注がれた預言者としてのイエス

[列王上 19:16](#) に、エリシャがエリヤの後を継いで油を注がれ、預言者にされたことが書かれています。預言者というのは単に誰かの代弁者であり、誰か他の人の気持ちを表す者を指します。神の預言者は誰でも、人々に神のメッセージを何らかの方法で語る人です。

イエスは神の気持ちと心をその最も高い方法で表すために、預言者の任務につかれました。イエスは「私を見たものは、父を見たのである」と言っています(ヨハネ 14:9)。[ヘブル 1:1-3](#) には、「神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿」である御子を通して、神は語られたとあります。イエスは神の国の福音をのべ伝えるという、まさにこの目的のために油注がれたのです([ルカ 4:18,43](#))。

私たちはイエスを最も偉大で最高の預言者だと心から告白しながらも、ある極端な立場にゆかないように気をつける必要があります。それについては次の3つのことを心に留めればよいのです。

- (1) イエスだけが神を表したのではないこと。

- (2) イエスが啓示を与えられた最後の方ではないこと。
- (3) 啓示はイエスの最も重要な業ではなかったこと。

## B. 油注がれた祭司としてのイエス

イスラエルの祭司として最初に油注がれたのは、アロンとその息子達でした([出エジプト 29:4-9](#))。祭司とは何をする人なのでしょう？基本的には彼は神と人間との仲介者です。特に誰かほかの人のために犠牲を捧げて、その人が神に受け入れられるようにすることでした。

イエスは祭司の役目を負いに来られて、油注がれてご自身を完全な犠牲として捧げられました。それは私たちが神に受け入れられるものとなるためです。それは十字架の上で成し遂げられたのです。[ヘブル 9:11-14](#) 参照。

ヘブル書の中心テーマはイエス・キリストの祭司性ですが、特にその祭司性がアロン家のものを超えているということに強調点があります。それというのも、アロン家の人々も罪びとであることには変わりがなかったので、旧約の祭司達は他の人々の分同様に、自分達の分も犠牲を捧げなければならなかったのです。こうした犠牲には罪科をのぞく本質的効力はありませんでした([ヘブル 10:4](#) 参照)。しかし、キリストは「このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪びとはと区別され、かつ、諸々の天よりも高くされている大祭司」であるので「彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々いけにえを捧げる必要はない。なぜなら、自分を捧げて、一度だけ、それをされたから」なのです([ヘブル 7:26,27](#))。彼のカルバリの丘での自己犠牲はたった一度で、いついかなる罪をも贖うものだったのです。[ヘブル 3:1](#); [4:14-16](#); [5:5-10](#); [8:1](#); [10:10-12](#) をも参照してください。

祭司としてのイエスの働きを表す重要な聖書の言葉がいくつかあります。第一にはもちろん「犠牲」です。イエスは犠牲--それも、世の罪を取り除く傷のない小羊です([ヘブル 10:12](#); [ヨハネ 1:29](#))。犠牲というのは罪科が転嫁されるものですが、それが実際の違反者の身代わりに捧げられるのです。イエス・キリストのみが「本物」の犠牲であって他の犠牲はすべてそのシンボルであるにすぎません。

次に重要な言葉は「宥め」です。ヘブル 2:17 にイエスは「民の罪のために、宥めがなされるため」(新改訳)「神のみ前にあわれみ深い忠実な大祭司」となると書かれています。イエスは宥めのために死んだのです。[ローマ 3:25](#); [ヨハネ 2:2](#); [4:10](#) 参照。

宥めとは何でしょう。それは受けるべき怒りをそらすための犠牲という事を特に表しています(怒っている妻の怒りをそらすために花を贈るとすれば、それは宥めということになるでしょう)。私たちの罪は神の怒りを受けて当然のものであり、神は聖なる義の方ですから、この怒りが充足されなければなりません。そしてそれは実際、私たちにではなく、キリストに対してなされたのです。

私たちの主はそれをご自分の内の取り込んで神の怒りを私たちからそらしてくださったのです。主は私たちの罪をご自分のものだとして負ってくださり、次にそれに伴う罰をも背負ってくださいました。罪はまるで磁石のように神の怒りを私たちの宥めの身代わりの方に吸いつけたのです。[2コリント 5:21](#); [1ペテロ 2:24](#); [ガラテヤ 3:13](#); [イザヤ 53:4-6](#) 参照。

同じ事をあらわすもうひとつの言葉は「贖い」です。贖うというのは「解放するために代金を支払う」という意味です。十字架は私たちの贖いです([ローマ 3:24](#); [エペソ 1:7](#))。キリストは私たちを何から贖ったのでしょうか。それは私たちが自分の罪の故に神に負っている負債、つまり、黄泉での永遠の罰という負債です。キリストが十字架を通し

## キリストの真理

て払ってくださったので、私たちはこの負債から解放されたのです。 [マルコ 10:45](#); [1ペテロ 1:18,19](#); [ガラテヤ 3:13](#) 参照。

十字架を通して成し遂げられた祭司としてのキリストの働きは、彼の最も重要なものです。イエスが犠牲・宥め・贖いとしてなされたことは福音の中心的な本質です。私たちが永遠の罰から救われることができるのは、ただただ救い主がそれと同等の苦しみを私たちの代わりに苦しんで下さったからです。これが聖書の教えのすべてのうちで最も基礎になることです。

### C. 油注がれた王としてのイエス

旧約時代には、神はご自分の民の上に王の位をもうけて、この任務のためにさまざまな人々に油を注がれました。例: サウル([サムエル上 10:1](#)); ダビデ([サムエル上 16:13](#))。王はその民を権威と権力をもって支配する人々です。イエスは王の王として、また主の主として王位につかれるために来られました。 [詩篇 2:1-12](#); [ヨハネ 1:49](#); [マタイ 12:1-5](#); [コロサイ 1:15-17](#) 参照。

ピラトが「それではあなたは王なのだ」と尋ねたとき、イエスは「あなたの言うとおり、私は王である」と言ってご自分が王であることを明らかにしました(ヨハネ 18:37)。パウロはこのときのことを「りっぱなあかし」と言っています([1テモテ 6:13](#))。私たちが、キリストは自分の生涯の主であり王ですと言うとき、同じように立派な証をする事になります。

キリストの王としての働きは特に悪魔との戦いに表れています。この面でのキリストの使命はしばしば見過ごされがちですが、キリストがこの世に来たのは実に彼と、また私たちの最大の敵である悪魔と死に立ち向かい、打ち勝つという目的の為なのです([詩篇 45:1-7](#); [ヘブル 2:14,15](#); [コロサイ 2:14,15](#))。十字架は戦場であり、復活はその勝利です。復活したキリストは戦いに勝った王であり、あらゆるものの主です。[コロサイ 1:18](#); [黙示 1:17,18](#); [ローマ 6:9](#) 参照。昇天によってイエスは天の国に凱旋し、永遠の支配を開始しました。[詩篇 24:7-10](#); [詩篇 110:1,2](#); [使徒 2:33-36](#); [エペソ 1:20-23](#) 参照。

要約すれば、私たちが「イエスはキリストです」と言うとき、それは彼が真理によって来たる預言者であり、私たちの罪の犠牲としての祭司であり、また私たちの命の主としての王であることを告白しているのです。

### . 神の子としてのイエス

イエスがしたと聖書が述べている力ある業を一体ほかに誰ができるでしょうか。ただの人間だったとしたらそれらのことを成し遂げることができたでしょうか。「ただの人間」だったならできなかったはずですが。これが油注がれた方が人間以上の方、つまり、神でもあったということの証拠です。ペテロの告白で「あなたは...生ける神の子です」とあるのはこの意味です。私たちがイエスを神の子と認めるとき、彼が誰であるかということ、つまり神であって人間であったと言うことになるのです。

## A. 神である子

難癖をつけたがる人々は、「神の御子」という称号がイエスの神性を意味するというに反対します。しかし、イエスの時代にその言葉が異邦人やユダヤ人によって使われていたことや、新約聖書での使われ方を検討すると、この称号が神を表すことは明かです。

たとえば、[ヨハネ 5:17,18](#)にはイエスが神を「私の父」といっていることが記録されています。ユダヤ人たちは直ちに神を冒瀆したかどで彼を殺そうとしました。というのはイエスが「神を自分の父と呼んで、自分を神と等しいものとされたからです。[ヨハネ 10:29-39](#)にも同様な出来事が書かれています。ユダヤ人たちはイエスを石打ちにしようしました。それは彼らが告発しているように「あなたは人間であるのに、自分を神としているから」(33節)でした。イエスは彼らの告発が「私は神の子である」(36節)といったご自分の宣言にあることを指摘しています。言い替えると、ユダヤ人の間ではそのような宣言は、自分を神とするものと明らかにみなされていたことが分かります。そして注目すべきことは、イエスはその宣言と宣言の意味することを決して翻さなかったということです！彼はただ「これが証拠だ。あなた方が判断しなさい」と言われただけです([ヨハネ 5:31-47](#); [10:37,38](#))。実際にヨハネ 5:23 でご自分を父なる神と同等に置かれたとき、イエスはこの宣言を強調されたのです。そこでは「すべての人が父を敬うと同様に、子を敬いなさい」といわれました。[マタイ 26:63-66](#); [ルカ 22:67-71](#) 参照。

### (ヨハネ 5:31-47)

31 もし、わたしが自分自身についてあかしをするならば、わたしのあかしはほんとうではない。32 わたしについてあかしをするかたはほかにあり、そして、その人がするあかしがほんとうであることを、わたしは知っている。33 あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわしたが、そのとき彼は真理についてあかしをした。34 わたしは人からあかしを受けないが、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。35 ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたは、しばらくの間その光を喜び楽しもうとした。36 しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっと力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えになったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父のわたしをつかわされたことをあかししている。37 また、わたしをつかわされた父も、ご自分でわたしについてあかしをされた。あなたがたは、まだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない。38 また、神がつかわされた者を信じないから、神の御言はあなたがたのうちにとどまっていない。39 あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。40 しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこよともしない。41 わたしは人からの誉を受けることはしない。42 しかし、あなたがたのうちには神を愛する愛がないことを知っている。43 わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるのであろう。44 互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか。45 わたしがあなたがたのことを父に訴えると、考えてはいけぬ。あなたがたを訴える者は、あなたがたが頼みとしているモーセその人である。46 もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである。47 しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか。

この称号の用い方を別としても、イエスは聖書の中で他の多くの方法でご自分が神であると宣言されています。[イザヤ 9:6](#) はメシヤに「大能の神」という名を当てています。[ヨハネ 1:1](#) では人としての言が永遠の昔から存在していて、それがナザレのイエスという神([ヨハネ 1:14](#))となられたと言っています。[ピリピ 2:6](#)にあるように、彼は神のかたちで存在しておられ、本当に神と同じ性質をもっていたのです。[詩篇 45:6](#); [ローマ 9:5](#); [テトス 2:13](#) 参照。

イエスが神の子ですと告白することは、彼が神であり、子なる神であることを受け入れることです。もしイエスが何

かそれ以下の方であつたら、救いの業をなすことはできなかつたのです。彼が神であることを否定するなら、私たちの救いをも否定することになります。

### B. 受肉した神

驚くべきことは子なる神が私たちの世界に人間として現れたということです。彼は単なる化身として人間の姿をとって来られたというのではなく、本当の肉体と魂を備えた人間として来られました。それがナザレのイエスです([ヨハネ 1:14](#); [ピリピ 2:7,8](#))。私たちにとってイエスはマリヤの子であり、しかも神の子です。言い替えば、彼は神性と同時に本当の人間性をもっておられます。

また心に留めておくべきことは、子なる神が人間となられたとき、その神性ないし神と等しい性質はどんなかたちでも減ったり、従属的なものとなったりすることはなかつたということです。イエスの神的輝きは人間の目には隠れて映りましたが、彼は肉体にありながら、真の神でした。「キリストにこそ、満ち満ちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿って」いるのです(コロサイ 2:9)。

キリストの業についての聖書の教えを理解するには、キリストがどなたかということに関するこの見解が必要です。イエスがなし得た業は、実に彼が在って在られた方であることによるのです。

1. イエスは人間でした。だから彼は死ぬこともできたのです。[ヘブル 2:9-15](#)。
2. イエスは罪のない人間でした。だから彼の死は自分の罪の故ではなく他の人の身代わりとなり得たのです。[ヘブル 4:15](#); [7:26-28](#)。
3. イエスは神であつて人間でした。だから、彼の死は誰か他の一人にとどまらず、人類のためであり得、また死に打ち勝つことができたのです。

## 第9章 回心についての真理:神の招き

罪びとは死の束縛と罰の下にあります。キリストは死に勝たれました。彼はすべての人に救いを可能にし、またそれを与えたいと思っておられます。ここでよく持たれる疑問は、「どのようにしてこの救いが一人一人の罪びとに、もたらされるのだろうか」ということでしょう。

これは回心という問題です。どのようにして未信者は信仰者となるのでしょうか？死んだに等しい罪びとがどうやって生命を得るのでしょうか？赦されていない人がどのようにして赦されるのでしょうか？そのような回心という大変化が起きるためには何が必要なのでしょうか？

回心のプロセスにはふたつの要素が関係しますから、質問への答にもふたつの要素があります。つまり、神の招きと人間の応答です。この章では神の招きだけを取り扱います。イエスはヨハネ 6:44,45 で、罪びとは救いを求めるように前もって仕向けられていないといっています。神が招くか、引き寄せるのでなければならぬのです(ローマ 8:28-30)。しかしこれはどのようにして起きるのでしょうか。このことに関しては誤った見解が広まっているので、聖書の立場を述べる前に、その誤った見解をまず検討してみる必要があります。

### ・ カルビン主義

神の招きについての誤った見解はカルビン主義にあります。カルビン主義というのは、16世紀にジョン・カルビンによって唱道された一連の神学教義ですが、考え方自体はカルビンより先のアウグスチヌスにもありました。カルビンの理論は普通、頭文字をとってTULIP(チューリップ)と要約されています。この頭文字はそれぞれ以下のことを示しています：

T(Total depravity 全面的墮落)

U(Unconditional election 無条件的予定)

L(Limited atonement 限定的贖罪)

I (Irresistible grace 不可抗的恵み)

P(Preservation of the saints 聖徒の保護

=「一度救われたら、永遠に救われる」)

すでに見たように、全面的墮落は聖書の教えではありません。このことは、この誤った理論の中で中心的重要なことを持っていますから、かなりのスペースをさきました。もし誰かが全面的墮落を認めるならば、神の招きに関することを含めて、カルビン主義の誤りに陥ってしまわざるを得ません。それでは、まずこれらについて説明し、後にその誤りをただすことにしましょう。

#### A. 無条件的予定

## キリストの真理

前にも述べましたが、全面的墮落説の中心には全面的無能力の考えがあります。これは罪びとは靈的に善いことを選択する力がまったくないとする考え方です。人間の意志は罪によってがんじがらめにされており、福音に対して信仰を持ってこたえてゆく自由意志の能力は破壊されてしまっているというのです。人間にとって救いという神の贈り物を受け取ることは不可能だとするのです。カルビンによれば、これがアダムの罪のゆえにキリストを除く全人類に及んでいる苦境です。

これは深刻な問題になります。人間にはキリストの救いが必要なのに、それを受ける力がなく、たとえイエス御自身がテレビの世界中継で、可能な限り力強く説得力ある方法で救いを提示したとしても、誰も力がなくて受け入れられないことになり、これではまるで墓に立ち、死人に向かって「さあ起きあがって墓から出てくる人にこの1千万円をあげよう」と言うようなものです。

そんなことではいったい誰が救われ得るでしょうか。カルビン主義の人にとってはその答は簡単です。人間が救いを選択できないのだから、神御自身が救いたい人を選ぶしかありません(そして、残り的人々は罪の中にとどまるのです)。どうして神がすべての人を選ばないのか、またこの人を選び、かの人は選ばないという理由が何なのかについては、人間の知るところではないとするのです。この主義の信仰は非常に単純です。全人類の中から神は特定の人を無条件に選び出し救う、とするのです。

神がいつこの選択をされたのかについては、神が宇宙の創造を計画されたときに行われ、すべてのものの創造に先立ち、誰が天国に行き誰が地獄に行くかを決めてしまったといひます。あらゆるものが事前に無条件に決定されたというこの見解は「予定説」と呼ばれています。

### B. 不可抗的恵み

全面的墮落と無条件的予定とが組み合わされると、カルビン主義での神の招きに関する「不可抗的恵み」と呼ばれる見解につながります。もちろん福音説教によってすべての人に向けられた対外的招きというものはあるのですが、これは罪びとの心に何等の影響も及ぼさないことになり、ですから、この対外的招きに加えて、神は選ばれた人々に対して、特別の内面的招きを通してなされるとしています(この「招き」は耳に聞こえる実際の声とか言葉とかいうものではありません)。この特別の招きを受けるべく選ばれた人々はそのために準備をしたり、願い求めたりしていたのではなく、むしろ望んでいなかった場合すらあるのです。彼らの心がいまだ努力とかをする以前に、神がこれらの選ばれた罪びとの心の内側に特別に働きかけて下さり、回心の全行程を瞬時に起こして下さるというわけです。

カルビン主義者はこれを特に聖霊の働きとしています。聖霊は選ばれた人々の上に降り、その人の状態と神との関係をまったく変えて下さるわけです。聖霊がその人に与えるものは新しい心(再生と新しい誕生)と罪の赦し、悔い改め、そして信仰そのもの--これらすべてです。

この招きには2つの特徴があります。第一にそれは精選であること。つまり、「選ばれた」人のみがそれを受けるということです。救われることにきまっていない人は招かれてはいないのであり、ただただ罪の内に死ぬしかないということになります。第二にそれは不可抗であること。これは神の超自然的働きであって、罪びとは逆らうことができませぬ。招かれた人々は必ず応答し救われることになり、これがカルビン主義と呼ばれる見解です。これに対しては次の節で答えてゆきましょう。

## ． 聖書の見解

人間が改宗する時に果たす神の役割に関するカルビン主義の見解は、全面的墮落説と密接に結びついているので、後者が誤りであることが明らかになっている以上、それにもなって前者も問題にならなくなります。しかし、全面的墮落説が聖書に反することはすでに明らかにしましたが、神の招きとの関連で、無条件的予定と不可抗的恵みについても聖書の見解を述べることにしましょう。

### A. 条件付き予定

多くの人々は聖書には予定 (predestination) の考えがまったくないと思っていますが、実はあるのです。パウロは言っています: 神は「私たちにイエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである」(エペソ 1:5)。「そして、あらかじめ定めた者たちを更に召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えて下さったのである」(ローマ 8:30)。 [2テサロニケ 2:13](#) 参照。

これはどういう意味でしょうか? いったいカルビン主義者が正しいということでしょうか? いいえ、そうではありません。なぜなら、彼らは神の予知 (foreknowledge) という、予定説の中での最も重要な要素のひとつについて誤解しているからです。大昔から神は、特定の人々を予定ないし選んで、復活のキリストとともに天に交えて下さいますが、それは神がその人々の生涯の特定のことにあらかじめご存知だからです。ローマ 8:29 がこのことをはっきり述べています: 「神はあらかじめ知っておられる者たちを、更に御子のかたちに似た者にしようとして、あらかじめ定めて下さった」。 [1ペテロ 1:1,2](#) 参照。

神があらかじめ知っておられるところの、救うかどうかを決定する事柄とは何でしょうか? 次の章で詳しく述べますが、神は単に、誰が福音に応答し救いの条件に合うかということをおぼろげにご存知なのです。神には現在・過去・未来のすべてを知る力があるからです。

ですから、確かに「聖書的予定」というものがあるのですが、それはカルビン主義の見解と同じではありません。少なくとも2つの大きな違いがあります。第一は、聖書的予定は条件付きであって、「無条件的」ではありません。神に選ばれるには特定の条件に合致する必要がある、その条件というのは聖書からどういうことかが分かっています。この条件に合致し選ばれるかどうかということは、実は**私たちの決心にかかっている**のです。

第二に、カルビン主義とは逆に、神は特定の罪びとを選んで信仰者とするべく予定するものではありません。むしろ、**神は(あらかじめ知っておられる)すべての信仰者を選んで、天に住むべく予定して下さる**のです(ローマ 8:29の「御子のかたちに似た者として、あらかじめ定めて下さった」というのは、私たちが復活の時に、キリストの身体と同じように栄光に包まれるということをいっているのです)。罪びとの誰が信じる者となるかということは神がお決めになることではありません。決定権は罪びとの方にあるのです。しかし、神は誰が御国に永遠に住むかということを決められますし、あるいはもうすでに決定しておられるのです。なぜなら、神は誰が福音を受け入れるかということをご存知だからです。神は私たち一人一人の名前まで知っておられます。 [ルカ 10:20](#) 参照。

## B. 福音による招き

罪びとの心はかたくなで、神への反抗をやめようとしないうし、また従おうともしません。だから、まさしくイエスが言われたように、「父が引き寄せて下さらなければ」(ヨハネ 6:44)誰もイエスのもとに来ることはできません。しかし神はどのような手段で罪びとを引き寄せ、招かれるのでしょうか。私たちの心の中に、何か分からないけれども、聖霊が入れることのできるスイッチのようなものでもあるのでしょうか。いいえ、聖書は回心の時のそういった要素については何も言っていません。神が招き、聖霊が罪びとを信仰に導く手段というのは、ただ福音のメッセージ、つまり神の言葉です。それが反抗の鎧を断ち切り、聞く耳のある心に信仰の種を植える力を持っているのです。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」(ローマ 10:17)。ペテロは言っています:私たちが「新たに生まれたのは、朽ちる種からでなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることはない生けるみ言葉によったのである」(1ペテロ 1:23)。 [ヨハネ 6:45; 12:32; 20:31; ローマ 1:16; ヘブル 4:12; ヤコブ 1:18](#) 参照。

この福音による招きの性質はどのようなものでしょうか。第一に、それは普遍的(universal)です。神が選び出したり選択したりするものではありません。神の救いはすべての人に開かれています。ヨハネ 12:32 でイエスが言っておられます、「そして私がこの地から上げられるときには、すべての人を私の所に引き寄せるであろう」。ここでの「引き寄せる」という単語は[ヨハネ 6:44](#)での「父が引き寄せる」と同じです。キリストが十字架によって引き上げられたというメッセージは、それを聞くすべての人の心を引きつけます。 [2ペテロ 3:9; 黙示 22:17](#) 参照。

しかし、この招きは拒み得る(resistible)ものです。招きはすべての人に向けられていますが、すべての人が招きを受け入れるとは限りません。罪びとにはなお自由意志があって、神が引き寄せて下さることに従うことも、拒むこともできます。「あなた方は応じようとしなかった」([マタイ 23:37](#))とイエスが言ったのは、これらの拒む人たちに対してでした。 [使徒 7:51; 2:41; ヨハネ 1:12](#) 参照。

ですから、これが神の恵みに満ちた招きという、回心の最初の過程です。次の疑問は、罪びとはその招きに対してどのように応じるのだろうか、ということです。

## 第10章 人間の応答としての回心に関する真理

回心の過程で人が果たす役割は、しばしば「救いの計画 (the plan of salvation)」と呼ばれることがありますが、表現が立派な割には、おそらくその意味が伝わらないでしょう。しかし用語法にこだわるつもりはありません。大切なのは、**罪びとがキリストの救いのわざの恩恵を受けるためには、神の招きに対してどのように応答すべきか**ということなのです。

「救いの計画」はさまざまに定式化されていて、どれが「正式」でどれが「正式でない」ということは言えません。よく、「信じ、悔い改め、バプテスマされ、クリスチャンとして生きる」といいますが、これにはかなり問題がありますので、むしろ以下のような「定式」を奨めたいと思います。それはこの章の小見出し順になりますが、「恵みにより、信仰を通して、バプテスマの時に、よい働きのために」というものです。

救いの計画をこのような定式で述べることには2つの利点があります。第1にそれは救いが恵みによるものであるという本質に合致しています。第2に、それは[エペソ2:8-10](#)という短い聖書の1節にのっとっており、[コロサイ2:12](#)にも並行聖句があります。

### ・「恵みにより」

「あなた方の救われたのは、実に、恵みによる ... それは、神のたまものである」(エペソ2:8)。「計画」の第1段階として「恵みにより」ということがありますが、それは救いの基盤を表しています。つまり、それは神の恵みのご性格とキリストの恵みのわざを示しています。スポットライトを例にとると、照らされたところ、つまり罪びとの応答がすぐに注目を引きますが、実は照らすスポットライトのあることのほうが重要なのです。こうしてみると、このあとの定式をどのように組もうと、それは恵みということと首尾一貫していなければならないということが分かります。

罪の救いが恵みによるものだというのを、最初にしっかり理解していることはとても大切なことです。そうすれば、このあとで救いが自分で勝ち得たものだとか、あるいは自分にその価値があるとかというような誤解をする事がないからです。というのは、知らず知らずのうちにこうした誤解をしていることが、本当によくあるのです。救いの計画が恵みによるものとしてでなく、律法主義にのっとって提示されることが余りに多いのです。その結果、回心した罪びとが、自分の業によって救われるのだという態度でクリスチャンとしての生活を始めがちです。

回心に当たって必要なことを説明するときには、律法を守ることによってではなく、恵みによって救われるために守らなければならない一連のきまりのように示すべきではありません(そんなことをすれば、長い律法を短くしたもので置き換えたのに過ぎず、依然として律法主義であることには変わりないことになります)。これらのことは私たちがしなければならないこととしてではなく、私たちができることとして教えられるべきです(本来はこれがウォルター・スコットや他の人々の考えだったのです)。自分自身を振り返ってみましょう。教会で救いの計画を提示するその仕方だけでも、神の恵みをボカしてはいなかったでしょうか。

そのような誤りはこの計画を教える方法上で犯されるのみではなく、定式上の各段階が救いのために重要性の点で同等だという印象をもたせることでも犯されるのです。その誤りの例としては、こんなふう言うことです、「救われるためにあなたができることは以下のことです: 信じて、悔い改め、バプテスマを受け、クリスチャンの生活を

送ることです」。こんなことを言ったのでは、救いを確かなものとするためには信仰やバプテスマと並んで、「クリスチャン生活」が同等の重要性を持っているという印象を与えてしまい、神の恵みが除外されてしまいます。というのも、「クリスチャン生活を送る」というのは、よい働きとか神の戒めを守るということを意味しますから、自分の行いによるものだと教えることになってしまいます。

こうしたことを避けて、恵みが明確化され強調されるにはどのようにしたら良いでしょうか。それはおそらく、この計画中の個々の要素に異なった助詞をつけて、それらと救いとの関係が各々違うということをはっきりさせれば良いのでしょう。それがここで奨められていることなのです。「恵みにより」とは恵みが救いの基盤だということです。「信仰を通して」とは救いを受ける手段を表しています。「バプテスマの時に」とは救いを受ける時を示し、「良い働きのために」とはクリスチャン生活の良い働きが救いの基盤だということだけでなく、むしろ救われた結果だということを示しています。

### ・「信仰を通して」

「あなた方の救われたのは、実に恵みにより、信仰によるのである。 ... 決して行いによるのではない」(エペソ 12:8,9)。信仰を通してというのは、罪びとが神の恵みに満ちた贈り物を受けるための手段を表しています。もし、ある罪びとが「救いを受けるために私は何をしたら良いでしょうか」と尋ねるなら、その答は「それを受け取るのはあなたが何かをするからではありません。信仰を通して受けるだけ」ということです(使徒 16:30,31 参照)。

救いは神の恵みによるものである以上、人間の行為によって手に入れることはできません。人間の行為によらずれば、恵みの本質に反することになります。「恵みによるのであれば、もはや行いによるのではない。そうでないと恵みはもはや恵みでなくなるからである」(ローマ 11:6)。救いはいかに支払われる報酬のようなものではなく、価なしに与えられる贈り物です(ローマ 4:4,5 参照)。これが信仰を通してだけ救いがやってくるという理由です。信仰は人が成し遂げる行為ではなく、神への態度とか考えあるいは、心の持ち方です。信仰は素直で柔軟なものですから、恵みと良く合致するのです。

このようにして信仰は救いを可能にする手だてなのです。みなさんの中には、どうして信仰などという弱々しく見えるものにそんな力があるのだらうと思う人があるかも知れません。しかし、信仰そのものに力があるわけではないのです。信仰の対象である全能の神に力が宿っているのです。自分の行為を頼みとすべきでないのと同様に、(多くの人が誤りがちですが)自分の信仰をも頼みとすべきではないのです。私たちが頼るべきなのは、神とその力、その約束です。繰り返しますが、これが恵みにより信仰を通してのみ救われるということなのです。なぜなら、信仰は救いがすべて神にかかっているということを、私たちが単に認めて受け入れるということに過ぎないからです。

信仰の本質は、神をそのみことば通りに受け入れることです。神の言われたことを私たちが信じるということは、信仰がかなり具体的な内容にわたることを意味します。というのは、神が聖書を通して多くのことを言っておられるからです。神が何かを語られ、私たちがそれを真理だと信じることは(同意)と呼ばれます。神がある約束をされて、私たちが神にはそれができると信じ守ることは(信頼)と呼ばれます。神を信頼し、神との約束をキリストにあって守ることは恵みにとどまることです。ローマ 4:16-25 参照。

気をつけなければならないのは、信仰の定義の中に人間の側の行いを持ち込んで来てしまって、恵みと信仰と

## キリストの真理

の間の自然の調和を壊してしまわないようにすることです。パウロは救いとの関係で信仰と行いをはっきり対置させて、こうしたことの過ちを指摘しています(「信仰により...決して行いによるのではない」[エペソ 2:8,9](#);[ローマ 3:28](#);[4:5](#) 参照)。行いを信仰の一部分にしてしまえば、「恵みによる信仰を通しての救い」という概念全体が無くなってしまいます。

同様に、信仰を神の恵みによる贈り物のひとつにしてしまえば、その自由意志性を壊してしまいますから、気をつけなければなりません。パウロは神の贈り物としての恵みと、人間の応答としての信仰をはっきり区別しています(「恵みにより...信仰を通して」[エペソ 2:8](#))。ヨハネ [6:28,29](#) でイエスは、信仰は人の決心にかかるものだといわれましたが、ここで彼は信仰を「わざ」と言っています。これは最も広い意味で言う「私たちのすること」を指しています。イエスは神が私たちに望まれるものという意味で、信仰をそうしたわざだといわれたのです。

以下のことも特に指摘しておきたいのですが、神への正しい態度としての信仰には、罪に対する正しい態度としての悔い改めがいつも伴うということです。神をそのみことば通りに受けとめるということは、罪を憎み、自分の生活の中の罪を除き去りたいという熱心さにつながります。これが悔い改めであり、これも恵みを受けるひとつの態度です。それはある意味で信仰の内面的事柄です。[ルカ 13:3](#);[使徒 2:38](#) 参照。(悔い改めは、人生の実際的やり直しといった形での人間的行為を含むものではありません。さもないと人間的行いによる救いに逆戻りしてしまいます。悔い改めとは自分の願い、あるいは変わりたいと思う気持ちであって、実際的変化そのものではありません。)

## 「バプテスマの時に」

エペソ書とコロサイ書がパウロのふたつの「獄中書簡」ですが、内容的に並行しているということは一般に認められています。[エペソ 2:1-11](#) と [コロサイ 2:11-13](#) が似ているということは、両方の内容を比較してみるとすぐ分かります。たとえば、罪の中での死、キリストと共によみがえること、生かされること、割礼が手によるかよらないかについて、信仰を通して神が働かれることなど。しかし、[コロサイ 2:12](#) はエペソ2章にはふれられていない重要なポイントを含んでいます。それは霊的割礼とか霊的死からの復活は神の行為としてバプテスマの時に行われるということです。「あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである」(コロサイ 2:12)。恵みは基盤であり、信仰は手段ですが、バプテスマは救いがはじめて与えられる「時」なのです。

聖書の不変の教えは、罪びとがキリスト教のバプテスマの時に恵みという贈り物を受け取るという事です。これがイエス・キリストとひとつになる救いにはいる時点です:「キリストに合うバプテスマを受けたあなた方は、みなキリストを着たのである」(ガラテヤ 3:27)。バプテスマは罪とがめと罰が取り去られて、罪びとが赦されて義なる人とされる時点なのです。「罪の赦しを得るために...バプテスマを受けなさい」とペテロは言っています(使徒 2:32)。バプテスマは同時に、聖霊が罪びとの命に受け入れられるときに、キリストと共に新しく誕生するという意味での再生が成し遂げられるのです([ヨハネ 3:5](#);[テトス 3:5](#);[コロサイ 2:12](#))。 [使徒 22:16](#);[ローマ 6:3,4](#);[1ペテロ 3:21](#);[マルコ 16:16](#) も参照して下さい。

これらの聖句が水によるバプテスマについて言っているという事は疑いのないところです。通例、クリスチャンが経験する真のバプテスマはひとつです(エペソ 4:5)。それには内側と外側(つまり水と霊)というふたつの面があり

## キリストの真理

ますが、1回の出来事です。 [ヨハネ 3:5](#); [ヘブル 10:22](#) 参照。使徒行伝やヨハネ伝中のバプテスマについてのこうした出来事への言及を、水によるバプテスマと無関係だとする事は、クリスチャンにとって不自然であってできない事です。

この聖書の教えは明確なのに、かなりの数の誠実なクリスチャンが拒んでいます。バプテスマは人間の行為だという前提に立って、彼らは救いは信仰を通して与えられるもので、人間の行為を通してではないといっています。それは正しいのですが、気をつけなければならない事は、聖書がどう言っているかです。聖書は私たちがバプテスマを通して(手段として)救われると述べているのではなく、バプテスマの時に(時期)救われると述べています。何かを受け取る手段というのは必ずしも、それを受け取る時期とは限りません。「~を通して(through)」という言葉は、必ずしもみんなが考えているように「~した時すぐに(as soon as)」という意味ではありません。神が言っておられるのは、私たちが信仰を通して救われるのだけれども、それはバプテスマの時にだという事です。これらふたつの事には矛盾がまったくありません。

しかし、バプテスマは人間の行為ではないか、という反論が依然として起きてきます。もしそうであるなら、救いとの関係でバプテスマを手段としようが時期としようが、救いは人間の行為に依存する事になり、神の恵みを無にしてしまう事になるのではないかというわけです。マルチン・ルターがこの質問を受けたとき、彼は適切な答をして、バプテスマは行為には違いないが、私たちの行為ではなく、神の行為であるといいました。罪びとはバプテスマの時に何らかの行為をするものではありません。実際、彼は本当に受け身なのです。「バプテスマを受けなさい」と言われるのであって、バプテスマをしなさいといわれる事は決してありません。実際の行為は神によってなされます([コロサイ 2:12](#)の「神の力」は、直訳では「神の行為」です)。神はキリストの血を罪を犯した魂に注ぎ、死んだ魂を聖霊を通して生命に引き戻して下さい。バプテスマは「良い行い」とかクリスチャンの従順の行為といったカテゴリーに含まれるべきではありません。それはユニークで独自のカテゴリーなのです。

バプテスマは恵みという事と矛盾しません。なぜなら、その本質は神の約束であり、この約束に私たちは信頼するからです。バプテスマは命令(ないし規則)ではなくて、約束(ないし恵み)なのです。私たちはこの視点に立って宣べ伝えるべきです。バプテスマの際に、神は罪びととお会いになって、救いという贈り物を下さると約束しておられます。救いに至る信仰をもった人は、すぐにこの約束を受け入れ、水によるバプテスマのうちに救い主にお会いしようと急ぐでしょう。(信仰がバプテスマの前提要件だという事から分かるのは、バプテスマが幼児やごく小さい子供のためのものではないという事です。)

### ・「良い行いのために」

私たちが恵みにより、信仰を通して、バプテスマの時に救われるのであるならば、キリストに従う行いはこの図式にどのように組み込まれるのでしょうか。パウロは、それは救いの結果だといっています:「あなた方の救われたのは、実に、恵みにより...良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである」(エペソ 2:8-10)。「キリストにあって、造られた」というのはクリスチャンのバプテスマの時に新しく造られた事、あるいは新生を指しています([2コリント 5:17](#) 参照)。神は私たちがクリスチャンとしての生活を送る事ができるように、新しくして下さいのです(本書第12章をご覧ください)。このようにして私たちは行いによって救われたのではなく、行いのために救われたのです。この前提要件を間違えないようにしましょう。救いの理解全体がここにかかっているからです!

## 第11章 義認についての真理

これまで、キリストの救いの業による恵みという事について何度かふれてきましたが、詳しく論じる事はしませんでした。これから終わりの章までは、3つの恵み、つまり義認・聖化・確信について、それらが一体何なのかという事をより深く説明したいと思います。

罪びとが陥っている苦境を表現するために「二重苦」という言葉を前に使いました。それは自分の罪が根本的に二つのあり方で私たちに影響を及ぼしているという事です。第一に、罪は私たちが科(とが)ある者として。第二に、私たちが霊的に欠陥のある、いわば病気の状態にします。ですから、問題は第一に、神との関係で責めあることであり、第二に病気の状態である事です。

イエス・キリストによってもたらされた救いは、これら両方の問題を一挙に解決するものです。ある人は賛美歌の中にこう要約しています：「水と血が、あなたの傷つけられた脇から流れた罪の二重の癒しとして。その科と縄目から私を救って下さい」(あるいは、「怒りから私を救い、きよめてください」)。

この章では、特に科(とが)の問題の解決に焦点を当てたいと思います。神はどのようにして私たちの科と責任を取り除き、ご自身をその律法との正しい関係に私たちを回復して下さるのでしょうか。義認についての聖書の教えにその答があります。

### 義認の意味

罪びとはどのようにして義とされるのでしょうか。これは、ローマ人への手紙のはじめの数章の主題です。神は「不信心な者を義とした」とパウロが言っていますが、それは律法を守ったからではなく、恵みと信仰とまたキリストの血によってです([ローマ 3:20,24,28; 4:5; 5:9](#))。

神が私たちが義とするとき、実際のところ何が起きるのでしょうか。義とされた人とはどういう意味でしょうか。このことばは基本的には正義(justice)(その語源は「正しい、公平」と関係があります。ある人は義認を正義とか神聖の実際の状態を意味すると解釈していました。この見解によると、「義とする」とは「正しい者、神聖で清い者とする(make)」を意味する事になります。これが、ローマ・カトリック教会の教えでした。トレント公会議の宣言はそのVI:7に、義認は「人間の内面を聖別し、新しいものに作り変え...その結果、人間は...義とされる」とはっきり記しています。神が私たちが義とし、その結果私たちは「内に義を受けた義なる者」であるわけです。他にもこのカトリックの教えに従う人々があり、その中には良く知られた異端の人たちもいます。

しかし、義認についてのこの理解は当を得ていません。「義化」という単語は「義とする」という意味ではなく、「義と宣言する、義とみなす、義として扱う」という意味なのです。[ルカ 7:29](#)にはこの点をはっきり書かれています。その直訳は、人々が「神を義とした」ですが、明らかにこれは、彼らが神を義なる方と宣言したという事であって、神を義なる方と為した(make)のではありません。その意味するところは、義認が私たちの状態や、罪に陥った性質の者である私たちの内側を変化させるというものではないことです。義認は神とその律法との私たちとの関係の客観的・

## キリストの真理

外形的変化です。それは基本的には罪の赦しや免除と同じです。[ローマ 4:6-8](#) を参照して下さい。

義認は法律的概念ですから、裁判をするときの状況に置き換えるとよく分かります。科(とが)も法律用語で、法律との関係で悪いことを表します。ですから、その修復としての義認は同様の観点から理解されるべきです。厳密に言って、「義とする」というのは「有罪宣告をする」(condemn)の正反対です。申命記 25:1 には、裁判官は「正しいものを正しいとし、悪いものを悪いとしなければならない」とあります。ローマ 8:33,34 は次のように問いかけています、「神様がご自分のものとして選ばれた私たちを、あえて訴えるのは誰ですか？神様ですか？とんでもない。神様は、私たちが赦しご自分と正しく関係づけて下さった方ではありませんか」(リビング訳)。[箴言 17:15](#)、[マタイ 12:37](#) 参照。

義認の意味を思い出すのに一番よい情景は、ちょうど裁判官が法廷で木槌を鳴らして「無罪！」と宣言する様です。私たちは本当は有罪なのですが、裁判官である神が、あたかも私たちが無罪であるかのように扱われるのです([ローマ 4:5](#))。義認の根拠にあるのは次のこと、つまり私たちに不利益な判決がそれ以上なされることはありませんということ。罰金や処罰、責任追求や怒りからも、すべて解放されるのです。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにあるものは罪に定められることがない」(ローマ 8:1)。私たちは罪びとなのですが、神が私たちがあたかも罪を犯したことがなかったかのように扱って下さるのです。(「私は義とされた」という意味は、神が私を罪など一度も犯したことがないかのように扱われるということです。)

明らかに、罪びとにとってこれほどせっぱつまって必要であり、また与えられて嬉しいものは他にありません。

## ・ 義認の根拠

次の主題は義認の根拠は何かということです。裁判官が誰かを「無罪」と宣言するとき、どのような根拠にもとずいてそのような決定に至るのでしょうか。そうした無罪判決を正しいものとする考慮事項は何なのでしょう。裁判官は正当な理由がなければ、そのようなことはしないのです。

そのような決定がなされ得るひとつの場合としては、その人が罪を犯していないときがあります。もしその人が犯罪を犯していない事が証拠によって分かったなら、その人の行いを根拠として無罪の判断を下さなければなりません。これと同じように、もしある人が 100%善良ないし無実であるなら、その人は義と認められることができるでしょう。その人が義認される根拠はその人自身の正しさと行いにあります。

ただ、私たちの場合、神はこのやり方をとることができません。なぜなら、私たちはみな罪を犯してしまっているからです。このため、自分の行いを根拠として義と認められることは誰にも不可能なのです。[ローマ 3:19,20](#) 参照。私たちの行いはただもう自分達が罪びとであって、処罰に価するものでしかないということを明らかにするだけです。それならば、神はどのようにして科(とが)ある罪びとを直視しながら「無罪」と言えるのでしょうか。神に「不信心な者を義とする」ことができるのでしょうか。[ローマ 4:5](#) 参照。

感謝すべきことに、実はそれは可能なのです。ただその根拠はただひとつ、キリストの流された血です([ローマ 5:9](#))。神は「無罪」と宣言して、私たちがあたかも一度も罪を犯したことがないかのように取り扱うことができようになりますが、それはただキリストが既に介入して下さって私たちの身代わりになって下さったためです。キリストが私たちに代わって有罪とされ、私たちの故に罰をその身に受けられました。十字架につかれることによって、私たちと神の怒りという燃やしつくす火の間にご自身を置かれたのでした。彼の死は神の義と律法の要請を充たすものでした。

## キリストの真理

私たちがイエス・キリストのもとに来るといふことは、私たちの負うべきものを既に支払った方のもとに来るといふことです。ですから、私たちがキリストにすがっているのをご覧になった神が言われます、「ああ、あなたはキリストと一緒になのか。それなら通ってよしい。なぜなら、キリストがあなたに代わって既にあなたの受けるべき執行を終えたのだから。本件は終了！」これがローマ 8:1 に言うことです：「こういうわけで、今やキリスト・イエスにあるものは罪に定められることがない。」

このようにして「御子イエスの血が、全ての罪から私たちをきよめるのである」(1ヨハネ 1:7)。私たちの罪は洗い落とされ(使徒 22:16)、帳簿から抹消されて、もはや追求されることはありません。私たちがキリストとその血のもとにあるとき、ある意味で、神は私たちの罪に目を留める必要がありません。罪はその視野から消え去っているのです。

赤いセロファンを使った説明を思い出す人もいるでしょう。白い紙の上に人の姿が黒いインクで書かれているのを思い描いて下さい。その人の上には赤いインクで落書きがしてあります。この絵の上に赤いセロファンを重ねると、赤い汚れは見えなくなってしまいます。ちょうどこのように、私たちは神の目には「キリストの血によって義とされた」のです。

したがって、私たちが義とされた根拠はキリストの義そのものによるのであって、私たち自身の義(良い行い)によるものではありません。義とは律法の要求するものが満たされたということの意味します。それには命令に従うか、もしくは罰に苦しむかの二つの道があります。イエスは両方を行ったのですが、私たちを義としたのは、そのうちの後者の方です。彼の「一人の義なる行為」(ローマ 5:18) -- つまり、彼の贖いの死 -- が私たちを義とし私たちを律法による処罰から解放したのです。

「神の義」とはこのことであって、福音の本質であり、また私たちの希望の根拠なのです(ローマ 1:17; 3:21,22; 10:3; 2コリント 5:21; ピリピ 3:9)。これが私たちの汚れた衣(イザヤ 64:6)をおおうために神が下さる「義の上衣」(イザヤ 61:10)です。賛美歌 280 番に「わが身の望みはただ主にかかれり、主イエスのほかにはよるべき方なし」と歌われているとおりです。

「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって義とされる」(ローマ 3:24)ということの意味するところです。ここにおいて、律法と恵みの違いは最もはっきりしています。律法のもとで人は自分の行いによってしか義とされ得ませんでした。つまり、100%良くなければ救われなかったのです。しかし、恵みのもとでは、私たちはキリストの行いに基づいて義とされます。キリストの行いが私たちを 100%赦された者とするのです。

## ． 義認の手段

罪びとはどのようにすれば義とされるのでしょうか。義認を受けるための手段は何なのでしょう。前の章でみたように、恵みの方式にあっては、義認を受けるための唯一の手段はイエス・キリストへの信仰でした。パウロは言っています、「私たちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである」(ローマ 3:28)。ローマ 5:1、ガラテヤ 2:16 も参照して下さい。パウロは義認の手段としての信仰を強調していますし、同様に「行いによって義とされるのではない」ということも強調しています。ローマ 3:28 で使われている「のではなく(apart from)」という前置詞の示すものは、私たちが義とされるのは私たちの行いの善し悪しを考慮してのことではなく、信仰によるのだということです。ローマ 4:6-8 も参照。

## キリストの真理

そうとすれば、信仰を持っている限り、従おうと従うまいと構わないという意味でしょうか。いいえ、そんなことは絶対にありません。聖書がはっきり言っていることは、義とされる信仰とは愛によって働く信仰だということです(ガラテヤ 5:6)。信仰は常に私たちを従順に導きます。私たちは「良い行いをするように」キリスト・イエスにあって造られたのです(エペソ 2:10)。

ヤコブ 2:24 もこう言っています、「人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない」。パウロとヤコブの違いは強調点の置きどころです。パウロははっきり言っています:義認に唯一直接に結びついているのは信仰だと。もちろん、信仰には常に従順が伴います。ローマ 6:1-19 を参照して下さい。

(Rom.6:1-19)

01 では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか。 02 断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。 03 それとも、あなたがたは知らないのか、キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。 04 すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。 05 もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう。 06 わたしたちは、この事を知っている。わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。 07 それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。 08 もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。 09 キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。 10 なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きているのは、神に生きるのだからである。 11 このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認むべきである。 12 だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わせることをせず、 13 また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされた者として、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。 14 なぜなら、あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるので、罪に支配されることはないからである。 15 それでは、どうなのか。律法の下ではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきであろうか。断じてそうではない。 16 あなたがたは知らないのか、あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである。 17 しかし、神は感謝すべきかな。あなたがたは罪の僕であったが、伝えられた教えの基準に心から服従して、 18 罪から解放され、義の僕となった。 19 わたしは人間的な言い方をするが、それは、あなたがたの肉の弱さのゆえである。あなたがたは、かつて自分の肢体を汚れと不法との僕としてささげて不法に陥ったように、今や自分の肢体を義の僕としてささげて、きよくならねばならない。

## キリストの真理

ヤコブは単に同じことを強調して次のように言っているのです。つまり、ある意味で私たちは行いによって義と認められるが、それは行いが間接的に義認と結びついているからである。というのも、義と認められる信仰は行動を伴う信仰だからである、と。そうでなければ、誰にいったい信仰のある無しがわかるでしょうか([ヤコブ 2:18](#))。

以上を要約すると次のようになります: 私たちが義とされるのは信仰と行いによるのではない(パウロ)。同様に、行いのない信仰によって義とされるのでもない(ヤコブ)。むしろ、私たちが義とされるのは、行う信仰によるのである(パウロとヤコブ)。

### ・ 義認の時

前にも述べましたが、信仰によって義とされるということは、信仰を持ったらその時ただちに義とされるということではありません。手段と時とは区別すべき二つの事柄です。私たちが義と認められるはじめの時として、神はクリスチャンのバプテスマという特定の時を備えておられます。バプテスマの時に信仰によって、ちょうど服を着るようにキリスト(義の衣)を私たちは着るのです([ガラテヤ 3:26,27](#))。私たちは罪の赦しのバプテスマを受け([使徒 2:38](#))、キリストに死に、キリストと共に葬られますが、それはバプテスマの時になのです([コロサイ 2:12](#); [ローマ 6:4-6](#))。

しかし、信仰による義認という聖書の中心点が強調するものは、私たちが最初に受けるものの上ではなく、私たちがそれを保持するあり方の上にあります。私たちはバプテスマの時から引き続き義とされ、イエスの血による贖いに心から信頼し続ける限り、クリスチャン生活を通してずっと義とされるのです。バプテスマの時に私たちは義と認められた人間になります。そして信仰によって義と認められる恵みの状態が続きます([ローマ 5:1,2](#))。 [ローマ 8:1](#); [エペソ 3:17](#); [1ペテロ 1:5](#) も参照。

ある一部の人は、バプテスマを単に私たちが過去の罪の赦しを受けるときだと考えています。そのように考えてしまうと、バプテスマによる神の赦しのわざが継続的なものだという事実をあいまいにしまいます。事は単に過去の罪を洗い流すだけでなく、義の衣を与えられてバプテスマの後もそれが私たちを包み続けるということなのです([ガラテヤ 3:27](#))。バプテスマの時には罪だけでなく、人間が赦されます。そして義認による赦しは、たとえ私たちが罪を犯す事があっても絶えず持続するものです。背教や恵みから離れて行くことは可能ですが、ひとつの罪を犯したとか、あるいはたくさん罪を犯したからといってそれが必ずしも背教ということになるとは限りません(信仰の内に歩みたいと思う限り、罪を犯す度に心底からの悔い改めの気持ちが必要で当然伴はずです。)背教というのは次のような時に起こってきます: 信仰を失うとき; イエスに信頼することをやめたとき; 彼の赦しに確信を持たなくなったとき; 彼を主としなくなって、従おうとしなくなったとき。

ちょうどこのことを問いかけた聖歌があります: 「十字架の血潮で、あなたの罪、あやまちは始末されてあるか。神なるキリスト・イエスを信じて救われたか。イエスの十字架をばいつも見て暮らしてあるか。」(聖歌 417 番)。 [= 十字架のイエスを見るたびに、赦された安らぎを覚えるか(原詞)]。

そうであれば、あなたは罪から、責めから、また地獄への思い悩みから解放されています。そして、神に仕えることに心を集中し、愛のみによって彼に従うことができるようにと解放されています。

## 第12章 聖化についての真理

罪が引き起こす二つの根本的問題とは、「**科**」と「**病める状態**」(sickness)でした。そして救いは両者の解決を含むものでした。先ほど見たように、義認は私たちの科を取り除くものです。しかし、もし救いがそれだけしか意味しないのであれば、私たちは依然として弱く、望みなく、また罪の鎖に押さえつけられたままでしょう。罪深い習慣や傾向の欲に打ち勝って前進することなどできないでしょう。

「しかし、恐らくそうしたことは大した問題ではないのではないか。つまり、私たちが恵みにより信仰を通して義とされるのであるならば、行いがなお必要だろうか。私たちは神の律法にそれでも従わなければならないのだろうか？ 罪を犯し続けるかどうかということは、本当に問題になるのか？」。誰かがそうした疑問をすぐに持つとしても、その気持ちは良く分かります。というのは、それほどに恵みの福音は驚くべきものであり、普通の考え方に比較すると、革命的でさえあるからです。ローマ 6:1 を見て下さい。そこにはこう書かれています、「では私たちは何と言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか。」

しかし、実はこれは大切な問題なのです。誰も好き勝手に考えることすらできません(ローマ 6:2)。そのために神は単に私たちの科を取り除くだけでなく、罪に弱められた私たちの状態を、霊的にもまた肉体的にも健康に回復するための手段を講じて下さったのです。これが「二重の癒し」(double cure)の2番目が意味するところであり、このことによって神は罪の束縛力を打ち壊して私たちを聖めて下さったのです。神がなさるこのプロセスはしばしば「聖化」と呼ばれますが、この章で取り扱います。

### ． 聖化の意味

「聖化」(sanctify)とは聖く(holy)するという意味です。聖化された(sanctified)人とは聖い(holy)人であり、聖人(saint)ということと変わりありません。これらは同じ意味を表すギリシア語とヘブル語の単なる翻訳の違いですから、英語の辞典を調べて意味の違いを見つけだそうとすべきではありません。

特に旧約聖書でのこれらの語の用いられ方を見ると、聖化や聖さには基本的に2つの面のあることが分かります。第1には本質的聖さ、つまり<普通のものとは別にして取って置かれている>とか、<切り離されている>状態です。これは神が全てのものに超越しているという意味の聖さに相当します。神は被造物そのものと異なっており、また、かけ離れておられます。第2の面は倫理的に見た聖さで、<罪からの分離>ということに関係しています。これは道徳的な清さと正しさという意味で神の聖さに対応するものです。

クリスチャンはこれら両方の意味で聖められています。私たちがキリストの血によって、古い自分の生き方や「今の悪の世」(ガラテヤ 1:4)から切り離されると、最初の聖化が始まります。これがバプテスマというキリストの血の贖いが及ぶときに起こる出来事なのです(1コリント 6:11; ヘブル 10:29; 13:12)。これによって私たちは暗闇の世界からキリストの世界へと移されます(コロサイ 1:13)。私たちは古いものから新しいものへと造りかえられます(2コリント 5:17)。これは既にそうなることになっている事実ですから、このようにして聖化された人々、つまり切り離された

## キリストの真理

人々は聖徒(saints)と呼ばれるのです([1コリント 1:2](#))。

私たちが聖化を受けるのはこの一回切りの出来事によるだけではありません。漸進的聖化ということがあって、この過程で恵みや知識、罪の克服、清い行いや聖性が増し加わるのです。これが、罪を犯すことのない神の聖性との共通点ですが、唯一の違いは神にあっては常にそうであるのに対し、私たちはそのように努めなければならないという点です。この意味での聖化は、義と真理の聖さという点です。ますます神のようになってゆくということです([エペソ 4:22-24](#))。

「あなた方を召して下さった聖なる方にならって、あなたがた自身もあらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者となるべきである』と書いてあるからである」([1ペテロ 1:15,16](#))。 [2ペテロ 1:4](#); [3:18](#) 参照。

他の派、特にウェスレーの流れを汲む人々は「全的聖化」(entire sanctification)ということを行います。彼らが信じているのは、「恵みの第2の働き」によって神はクリスチャンに道徳的な完全性をこの世にあってお与えになるということです。しかし、この見方は聖書にはほとんど根拠がありませんし、経験的にも矛盾しているようです。聖化は全クリスチャン生活を通じ、成長過程として続くのです。私たちは完全な聖性をめざして努力するのですが([1テサロニケ 5:23](#); [マタイ 5:48](#))、その完成は死の後にのみ来ると考えられます([ヘブル 12:23](#)「全うされた義人の霊」参照)。

## ・ 聖化の可能性

私たちの生き方の目標とすべき聖さのモデルは神ご自身の聖性です([1ペテロ 1:15,16](#))。その聖さの御性質は聖書にあらわされたみことばを通してのみわかります。この意味で私たちは神の言葉によって聖められるのです。[ヨハネ 17:17](#); [使徒 20:32](#); [1ペテロ 2:2](#) 参照。

ただし、なすべきことを聖書から知ったからといって、それで実際にできるとは限りません。罪びとの霊的弱さを考えれば、知識だけでは聖さを生み出すに充分ではないということがわかります。神の言葉にふれ、強められて悪を離れようと心に決めた時でさえも、自分の力では罪を憎み打ち勝って善を行う可能性も力もないということがわかります。[ローマ 7:14-24](#) 参照。

しかし、これこそ神がキリストの救いのみわざによって備えて下さった恵みのひとつなのです。つまり聖められた人生を送るための可能性と力です。この節では神が聖化を可能なものとするためにして下さった事を説明したいと思います。

救われる前の人にとっては、真によいこと、つまり内面的にも外面的にも良い行いをするのは不可能です。罪びとは霊的には死んでいますから([エペソ 2:1](#))、神から切り離されています。この不信の状態では、彼は神を喜ばせる行いをする事ができません。「信仰がなくては、神に喜ばれる事はできない」(ヘブル 11:6)。木自体が変わらなければ、悪い実を結び続けるのです([マタイ 7:16-18](#); [12:33-35](#))。

しかし、回心の時に神は私たちを変えて下さって、罪の力から解放し、聖さを受けられるようにして下さいます。この変化は新生ないし再生と呼ばれ([テトス 3:5](#); [ヨハネ 3:5](#))、あるいは再創造([エペソ 2:10](#); [2コリント 5:17](#))、

## キリストの真理

死からの甦り([エペソ 2:5,6](#); [コロサイ 2:12,13](#))とも呼ばれます。これは聖霊が私たちの心に働いて起こす変化であり、義認が神との関係の変化であるのとは対照的に、私たちの実際の「状態」の変化なのです。再生も最初の聖化(initial sanctification)も同時に起こりますが、両者が区別すべきものだという事は大事です。

カルビン主義の不可抗の恵みという考え方には、この変化に相当するものがありません。カルビン主義によれば、聖霊は罪びとが変えられたいと思ったり、信仰を持ったりする前にその心に入って変えるのだというのです。しかし、聖書によれば、再生は罪びとが神の言葉によって信仰を持ちたい・変えられたいとの願いに導かれ、その後で神の霊の人を変える力に自分を委ねるのです。この「神の働き」はクリスチャンのバプテスマのときに行われ、そこで聖霊が与えられて、罪びとは新しい生命に引き上げられるのです。[使徒 2:38](#); [コロサイ 2:12](#); [ヨハネ 3:5](#); [テトス 3:5](#)を参照して下さい。

聖霊がどのように働くのかとか、その変化の本質がどのようなものかということについての具体的説明は聖書には書かれていません。しかし、大切な事は、再生の本質ではなく、その結果なのです。内面的変化の目的が、私たちが聖めてクリスチャン生活を送れるようにすることにあるというのは明かです。エゼキエル 36:26,27 はこう預言しています:「私は新しい心をあなた方に与え、新しい霊をあなたがたの内に授ける...私はまたわが霊をあなたがたの内に置いて、わが定めに進ませ、わが掟を守ってこれを行わせる」。エペソ 2:10 はとても具体的です:「私たちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである」。聖霊の業である内面的再創造の目的は私たちが良い行いをするようにすることです。こうして聖化が可能になるのです。

## ・ 聖化のための力

クリスチャンのバプテスマによって聖霊が与えられるときに、すぐに起きる結果は新しい生命(new life)です。持続的結果はその聖霊が私たちの体と命そのものに宿り続ける事です。パウロはクリスチャンの体は「自分の内に宿っている聖霊の宮」であると言っています(1コリント 6:19)。イエスは信じる人々に活力に満ちた泉のような聖霊が与えられるでしょうと言っています:「私を信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。これはイエスを信じる人々が受けようとしている御霊を指して言われたのです(ヨハネ 7:38,39)。[ローマ 8:9-11](#)を参照して下さい。

なぜ聖霊は私たちのうちに宿るために来るのでしょうか？それは私たちが聖化し、聖いものとして下さるためです。その方法は、決して私たちの知識を増したり、新しい啓示とか、何か神秘的な「導き」と言ったものを与える事によるものではありません。(知識は聖書を通して既に与えられているのですから)。むしろ、聖霊は私たちに力を与えて聖めるのです。私たちの内に特別な方法で宿ることによって、聖霊はいつでも引き出せる力と強さの源なのです。私たちはその方と共に働きますが、その方なしに私たちは聖められる事ができません。

キリスト教の初期には、聖霊は教会のある人々に奇跡を行う力を与えました。これらの奇跡的な霊的賜物には特殊な目的があって、新約聖書がまだ完結されず、各教会に流布していなかった初期クリスチャン時代の特別な必要を満たすためのものでした([1コリント 13:8-13](#)を参照)。現代の私たちは聖霊からこの種の力を受ける事を期待すべきではありません。

## キリストの真理

聖霊が本当に私たちに下さる力は、しかしクリスチャン生活にとってとてもすばらしく、また有益なものです。聖霊は私たちに道徳的な力や霊的力、誘惑や罪に対抗して打ち勝ち善を行う力を備えて下さいます。罪と戦い、救いのこうした局面である聖化を成し遂げる私たちの意志力を強めて下さいます。パウロはこう祈っています：「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により力をもってあなた方の内なる人を強くして下さるように。」(エペソ 3:16)。あなたも「自分の救いを達成すること」ができます。なぜなら「あなたがたの内に働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だから」です(ピリピ 2:12,13)。[ローマ 8:12-14](#)、[1ヨハネ 4:4](#)、[1コリント 10:13](#)を参照。聖霊は私たちと共にいて力を与えて下さいますが、それは私たちが目を覚まして意欲的に罪と戦い、聖さを求めようと一生懸命取り組む限りにおいてなのです。私たちがそうするならば、聖霊は私たちを助け、善であろうとする内側の力を強めて下さいます。ただ、自分の力や意志力にのみ頼ろうとすべきではありません。むしろ、聖霊の力により頼むべきです。聖霊を通して力を与えて下さるとの神の約束に信頼しましょう。[エペソ 3:16](#)はこの内側の力を求める祈りの良い例です。

### ・ 聖化を求める動機

一部の人は誤解から恵みによる救いの結果、私たちは神の戒めに従う義務から解放されたのだと考えています。真理のこのうえない誤解です。神に従う義務は天地創造の事実とその基礎を置いています(詩篇 24:1,2)、何物もそれを変更することはできません。恵みによって救われていることは、この義務の上に何の影響も及ぼしません。律法からの自由は義務からの自由を意味するものではありません。私たちは恵みのもとでは救いの道としての律法から自由になっていますが、それは従順という標準ときまりを守らなくとも良いということではありません。恵みによる救いは、私たちがみこころに従いたいと思う動機を大幅に変更するものではありません。客観的義務(なぜ私たちが何かをすべきなのかということ)と主観的動機(なぜ私たちが実際にそれをするのかということ)を混同すべきではありません。前者は変わることがありませんが、後者は私たちが恵みのもとに来るときに大幅に変わるのです。

人が律法によって(つまり、律法を守ることによって)救われようとするとき、その人の行いが自分の救いの基礎であり、手段であることとなります。したがって、その人は単に地獄行きを免れ、天国に行きたいという動機で律法を守ろうとするだけです。しかし、恵みのもとでは地獄行きを免れ天国に至るのは、信仰によって受け取る贈り物であって、行いによるものではありません。ですから、私たちが律法を守る動機はもはやそのようなものであってはなりません。私たちがクリスチャンとしての生活を送るのは処罰への恐れや報償目的によるものではありません。私たちには信仰によって義とされているということが分かっていますから、これらの低次元の動機から解放されています。

私たちが罪と戦ったり、善であろうとするのはいったいどういう動機からでしょうか。それはなにものよりも強い、感謝からくる愛という動機です。私たちがもし本当に神を愛するならば(そして神が私たちにして下さったことを知ったからにはそうせずにはおれないのですが([1ヨハネ 4:18,19](#)))、本当に神を愛するならば、私たちはみこころを行うことで神に喜んでいただきたいと思うはずで、「もしあなた方が私を愛するならば、私の戒めを守るべきである」と私たちの主は言われました(ヨハネ 14:15)。信仰は行動します。それは愛を通して行動します([ガラテヤ 5:6](#))。

## 第13章 救いの確信についての真理

「どうしたら確信が持てるのだろうか？」実際のところ、これが問題なのです。私たちが一番はっきりほしいのは、今、神によって受け入れられていて、また将来にも栄光にあずかるということに関する確信です。端的に言えば、私たちには「祝福されているという確信」つまり、救いの確信が必要なのです。

確信とは何でしょうか。私たちは確信を持つことができるのでしょうか。もしできるとすれば、それはどんな根拠によるのでしょうか。この「キリストの真理」の最終章では、これらの質問に答えたいと思います。

確信の問題についてはいくつかのアプローチの方法があって、そのあるものは聖書の答えに合っていません。聖書の答えを説明する前に、二つの誤った見解を調べてみましょう。

### ・「いったん救われたら、永久に救われている」

救いの確信ということをめぐるよく主張される二つの見解は、互いに両極端に立っています。一つは「いったん救われたら、永久に救われている」と一般に言われるものと、もう一つは確信などありえないとする立場です。

「いったん救われたら、永久に」の立場はしばしば「永遠の保証」(eternal security)ともよばれます。この立場は次のようなものです：人がいったん本当の信仰者になった以上、その信仰を(少なくとも永久に)なくしたりすることはできないのだから、その人が救いを失ってしまうということは不可能だ；キリストの贖いの利益をはじめて受けた瞬間から、その人は永遠に保証されるのだ；その人は恵みから離れ落ちるなどということは心配する必要がない；神は永遠に信仰の内に保って下さる。

これはカルビン主義全体系の中でなくてはならない見解です。T - U - L - I - Pという頭文字の中のPは「聖徒の堅忍」(perseverance または preservation of the saints)を意味します。それは全的墮落(total depravity)、無条件的選び(unconditional election)、不可抗的恵み(irresistible grace)といった一連の理論上にあります。それによると、神は天地創造以前に、全的墮落にある人々のうちの誰を救うかということは無条件に定めていて、あらかじめ定めていた時期が来た時に、その人を不可抗的に召して、信仰という贈り物を下さるのだというのです。そして、神は始めから終わりまで至上のコントロール力を持っておられるので、誰が終わりの時まで信仰を維持するかを見きわめるに誤ることがないというのが純カルビン主義です。

ここで思い起こすべきことは、カルビン主義は信仰が持つ自由意志の性格を否定しているということです。「いったん救われたら、永久に」というのはこの否定を別な観点から言ったものです。この方式では、人は自分の自由意志によって信じることをやめ、救いを押しやることもできません。純カルビン主義の宗派(たとえば、ほとんどの聖書信仰に立つ長老派)はその理論に立っています。他の派(たとえば、全部ではないにしてもいくつかのバプテスト派)は「永遠の保証」教理は採用していますが、基盤となる残りの教理は否定していて首尾一貫していません。

「一度救われたら永久に」という見方は、聖書の教えに反するものとして否定しなければなりません。確かに神が私たちを見捨てることはなさいませんが([ヨハネ 10:28,29](#); [ローマ 8:31-39](#))、私たちが神を見捨てるということは充分有り得るのです。聖書は救いが条件付きであるとはっきり言っています。受け取って、しかも保ち続けるということは、主なるキリストに自分を明け渡すという私たちの自由意志による条件にかかっているのです。イエスは「もし人

## キリストの真理

が私につながっており...もし私の戒めを守るならば...」(ヨハネ 15:5-10)、あなたがたは大丈夫だと言っています。しかし、「もし(訳注:この語は日本語聖書には訳出されていないが、ギリシア語原文にはある)人が私につながっていないならば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて焼いてしまうのである」(ヨハネ 15:6)。あるいは、パウロが言っているように、「もし(訳注:原文にあり)あなたがたが、ゆるぐことがなく、しっかりと信仰に踏みとどまり、既に聞いている福音の望みから移りゆくことのないようにするなら、あなたがたは救われる(コロサイ 1:23)。しかしパウロは[ローマ 11:20-22](#)で、もしあなた方が神の慈愛にとどまることをやめるならば、惜しまれずに切り捨てられるであろうと言っています。

人が恵みから脱落し得るということは「ヘブル人への手紙」全体の前提になっています。この書の主題そのものがキリスト信仰を捨てることの可能性や危険性、それに愚かさです。明らかに一群のユダヤ人クリスチャンが、自分達のキリスト教への改宗について疑問を持っていたことと、キリストを捨ててキリスト以前のユダヤ教に戻ることを考えていたことを示しています。ヘブル人への手紙はこの背教を思いとどまらせようとして書かれたのです。

たとえば、ヘブル 6:4,5 は「いったん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、また、神のよきみことばと、来たるべき世の力とを味わった者たち」について語っています。ここからわかるように、これらの人々とは本当のクリスチャンたちのことをさしています。しかしヘブル 6:6 では、もしこれらの人々が「そののち墮落した場合には」またもや神の御子を自ら十字架につけてさらしものにし続ける限り、「ふたたび悔い改めに立ち帰ることは不可能である」と言っています。明らかにこれは恵みからの実際的脱落を示しています。[ヘブル 2:1-3](#); [3:6-14](#); [4:1,11](#); [10:26-39](#); [12:25](#) を参照して下さい。このように「いったん救われたら永久に」というのは救いの確約に関する聖書の教えではないというのが結論です。

### ・「救いの確約はない、一生懸命励むのみ」

もう一つの誤った見方は、「救いの確約はない、一生懸命励むのみ」と要約できる極端論です。この立場を取る人々は、救いの確約そのものもありえないと否定しています。私たちがクリスチャンとしてどんなに励もうが、神の目に良しとされるかどうかはわからないと彼らは言うのです。

ある人々は永遠の救いの確約を拒絶してこの極端論に走ります。彼らの誤りは、「いったん救われたら、永遠に救われる」とする無条件的確約説が、救いの確約そのものだと混同している点にあります。つまり、前者(無条件的確約説)を否定するあまり、救いの確約そのものも捨て去ってしまっているのです。

ただ自分の救いについて確信が持てない事の理由としては、神の恵みを誤解している場合が一番多いのです。クリスチャンでも救いが多かれ少なかれ、自分の行いによって、つまり善人であるかどうかによって決まると考えている人がたくさんいます。こんなふうを考え、しかも自分が無価値な罪びとだとあきらめてしまえば、疑いや悩み、絶望にずたずたに引き裂かれてしまう以外にありません。この人は自分が善人でないと分かっているのです。こんな状態で望み得ることといえば、教会にいるときに死ぬか、毎日の祈りの中で許しを請っている時に死ぬかすることぐらいです。

また、たとえ確信がある人でも、むしろそれをまるで善人だから救われたのだというような、自分の高慢さや傲慢さだとして自己を責めます。しかし、救いは赦しから来るのであって、善人であることから来るものではありません。

「確約はないのだから、一生懸命励め」という救いへの態度は「いったん救われたら永久に」という態度と同様に、聖書的には何等根拠がありません。どちらも誤りです。では、聖書は何と言っているでしょうか。

### ・ 聖書的確信

救い的確信についての聖書の態度は1ペテロ 1:5 に良くまとめられています。つまり、私たちは「信仰により、神の御力に守られている」のです。ここで強調されているのは、神が約束に忠実な方であることと、クリスチャンが信仰を持つことの両方が救い的確信に関しては非常に大切だということです。

#### A. 「神の力によって守られている」

「神の力によって守られている」ということの強調点は、神の確かな信頼性です。はっきりしていることは、神が私たちを決して見放されることも、のけ者にすることもありえないということです([ヘブル 10:23](#) 参照)。また、私たちが外敵から身を守るために必要なもの全てを備えて下さるといこともはっきりしています([ヨハネ 10:28,29](#); [ローマ 8:31-39](#); [1コリント 10:13](#); [2テサロニケ 3:13](#); [1ヨハネ 4:4](#) 参照)。その中には聖霊、聖書、祈りに加えて教会とその仲間達や牧会者たちも含まれます。

その中でも、神ご自身の確かな信頼性と、尽きることのない愛が最大のものです。パウロが[ローマ 5:1-11](#) で教えているところによれば、この愛こそが私たちの救い的確信の堅固な基礎です。この聖書箇所ではパウロは救いには2つの基本的な過程があると言っています。第一は怒りから恵みへ；第二は恵みから栄光へです。怒りから恵みへの移行がなんととっても一番難しく、また極端で、あるいはそんなことがありえないと思われるかも知れません。しかし、神の愛がそのことを可能にして下さったのです。そうとすれば、神の愛が次の過程に私たちを連れていって下さることを疑うことができるでしょうか。なぜなら、次の過程の方が前の方と比較してみてもずっと自然なのですから。

この聖書箇所ではパウロ考え方の跡をたどってみることは、非常に参考になります。私たちが神に敵対していたときに、愛の神は最もすばらしい贈り物を備えて下さったほどですから、私たちが神の友である今は決して私たちを見放されることはありません。私たちが反抗的で罪深い、どうしようもない敵だったときに、神は何をして下さったのでしょうか？ご自分の息子を、私たちの苦しみと身代わりをするために賜ったことですか([ローマ 5:5-8](#))。しかし、私たちが神の敵だったときに神の愛がそうして下さったのなら、義とされ和解を受けている今はなおさら、それ以上のことを神がして下さるといことは確実なことですか([ローマ 5:9,10](#))。

神がその敵のためにも死ぬという究極のことをして下さったのですから、ましてご自分の民を救って下さらないということが有り得るでしょうか。神の愛は私たちに欠けているものを補ってなお余りあるものではありませんか？ご自分の友への神の愛が、ご自分を憎む人々への愛に劣っているということがありうるでしょうか。もし神の愛が怒りと恵みの間にある、広く深い隔たりをも越えうる架け橋であるのなら(その橋の上に私たちは「今立っている」([ローマ 5:2](#))ののですが)、「なおさら」この同じ愛は恵みと栄光の間のより小さい隔たりを越えうるはずではありませんか！この神の愛の「なおさら」が、私たちの確信の基盤なのです。

## B. 「信仰によって」

[第1ペテロ 1:5](#)には、私たちが「信仰により」神の御力に守られていると書かれています。このわずかな表現の中に、私たちは救いの確信に関する2つのことを学ぶことができます。第1に、確信は絶対的でも、無条件でもないということです。神の愛が無条件のものだということは確実なことです。その神の愛に私たちがあずかるかどうかは、私たちの信仰しだいなのです。私たちが神の恵みにあふれた約束に安んじて信頼している限り、神はその恵みのうちに私たちを守って下さいます。もし、信頼することをやめるなら、私たちはみずからの意志で自分を神から切り離すことになるのです。

私たちが「信仰によって」神の守りを受けるのだということは、つまり救いの確信は条件付きだということを示しています。私たちがキリストにあって神の約束を誠実に信じる限り、神との今の関係がいつまでも保たれるということが確かです。しかし、いつか私たちが信仰を失って、恵みから落ちてしまうという可能性は常にあります([ガラテヤ 5:4](#))。ただ、誠実なクリスチャンなら誰でも、イエス・キリストへの信頼を持ち続けようと最大限の努力をするはずで

す。

神の守りは私たちの「信仰を通して」のものであるということは、第2番目の結論、つまり私たちへの救いの確約は私たちの行いを条件としているのではないということです。前に述べましたが、私たちが義とされるのは律法によって規定される行いとは無関係の、信仰によるのです([ローマ 3:28](#))。私たちが信仰によって義とされるということを知ることが、救いの確信への本当の鍵です。

義とされるということの意味は、神との間に平和を得ていること([ローマ 5:1](#))、罪に定められないこと([ローマ 8:1](#))です。信仰によって義とされるということの意味は、この平和と自由が私たちの善い行いを条件としているのではなく、すべてを贖うキリストの血に私たちが信頼し続けることにかかっているということです。[ローマ 5:1-11](#)でパウロが述べている2つの過程のことをちょっと思い返してみると、第1の過程での私たちの関わり方は信仰という語に要約されました。怒りと恵みの間にある深淵を越えたのは信仰によってであって([ローマ 5:2](#))、行いによるものではありませんでした。この最初の、渡り得ない深淵を、自分の行いによって越えたのではなかったように、まさしくそのように、第2の深淵だって自分の行いによって越えるのではないのです。神がその恵みによって橋を架けて下さるので、私たちが信仰によってその恵みに依り頼むのです。

言い替えば、私たちの救いの確信はキリストの血によって私たちが義とされたということを知るところからくるのであって、私たちが或る聖性に達したということから来るものではありません。「自分はどれくらい善人だろうか」よりも、「自分はどのようにして赦されているのか」ということのほうが問題であり、私たちがキリストのゆえに、バプテスマのとき以来 100%赦されているということが分かっています。

イエス・キリストを通しての、神との現在のつながりについてのこの確信は、私たちに「栄光への希望」を与えます([ローマ 5:2](#); [コロサイ 1:27](#))。希望とは未来についての確信です。それは何か良いことへの確信に満ちた期待です。普通、希望というたいてい願望以上のものではないという意味で使われますが、聖書ではそうではありません。聖書で希望という言葉が使われるのは、それが不確実だからではなく、時間的に未来に関わるからなのです。[ローマ 8:24,25](#)を参照して下さい。そして、キリストの血によって、いま義とされているということを信仰によって信じる私たちが、この希望を - つまり、キリストの栄光に永遠にあづかるという確信に満ちた望みを持っているのです。

「彼についてこの望みを抱いているものは皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」(1ヨハネ 3:3)。